

第二章 モノとしての剣鋒

計測調査が拓く祭礼民具研究の可能性

伊達 仁美

はじめに

計測調査は平成二十三年度の春季調査から始まり、二年間の調査で京都市内を中心に約三百本の剣鉾を確認した。調査を始めるにあたり、剣鉾のどこを計測すればいいのか、まず昭和五十九年度・六十年代に実施された京都市剣鉾調査の調査カードを参考に検討を始めた。先行で始まっている民俗調査の事例も加え、各構成部材の寸法、材質、重量について四十六箇所の共通項目を設定し、計測調査カードを作成した。計測調査は、寸法や重さの計測とともに剣鉾の情報として、剣や鍔に刻まれている銘や箱に記されている墨書を記録した。付属品の確認、銘文記録なども含めると剣鉾の部材に関する情報を網羅したカードになる。

なお、真鍮製の剣の金属配合比を調べることで、剣鉾の時代性や地域性が見えてくることを仮定し、一部の剣について調査を行った。これについては、それぞれの調査カードには反映していない。

一 計測調査の意義

一般的な祭礼調査は、民俗学的な面からアプローチされることが多かった。また、祭礼に使用される道具などについては、おもに工芸的な面からの調査がなされてきた。本調査の調査名は「計測調査」ではあるが、数値的な結果

を提示するだけではなく、いわゆるモノ情報を作成することを目的とした調査である。

鉾差しは、地域によって差し方の差異が認められ、東山、梅ヶ畑、嵯峨、鞍馬と分類することができる。東山はおもに左京、上京、下京に分布し、差し方は前側に大きく剣先をならせるところが特徴である。梅ヶ畑は東山のように剣先を前後にならせるが、剣挟はカシ材を使用し、前側だけに大きくしなめることはない。嵯峨は剣鉾全体を大きく揺らしながら進む。鞍馬の四本鉾は四本の棹で支えることが特徴である。これらの差し方の違いが剣鉾の寸法や形態、材質に影響を与えているのではないかと仮定することから計測調査を始めた。

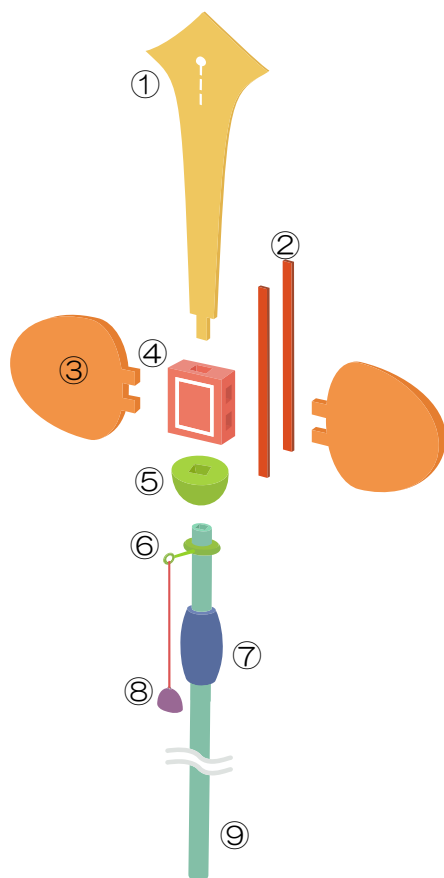
本調査において、剣鉾のあらゆる構成素材の寸法の測定や材質の確認を行うとともに、構成部材本体に刻まれた銘や収納されていた箱に書かれていた銘文も記録した。その結果をもとに比較し分析することで、時代性や地域性、差し方の差異などが見えてきた。

二 標準名称の設定

各地の剣鉾において様々な部材バリエーションが確認され、部材名称は地域によって違いがみられ、調査地での呼称では名称が混同する恐れもあるため、新たに調査上での標準名称を設定した。

銘文等に記載された文字表記や、地域呼称のなかで、最も適切と考えられるものを標準名とした。標準名として抽出した各部材名は以下の通りとした(表1)。銘文等に記載されているものは漢字で、地域での呼称はカナで記した。

[図 1] 剣鉾構成部材詳細図



[表 1] 剣鉾構成部材標準名対応表

番号	本文中の表記	部材名称ならびに呼称
①	剣	剣 剣先 鉾先 招 招剣 ケン ケンサキ マネキ
②	剣袂	剣袂 竹 はさみ木 袂 ケンノハサミ タケ
③	鍔	鍔 花形 葉 羽 飾羽 剣鍔 カザリ
④	鍔受	額 ガク
⑤	受金	受金 州濱 ウケガネ スハマ カブラ
⑥	腕木	なし
⑦	鈴当	鈴当 リンアテ リンアタリ ナツメ
⑧	鈴	鈴 リン レイ スズ タク
⑨	棹	棹 長柄 棒 サオ ナガエ ボウ ※由岐神社の四本鉾の場合、(前) オヤ オヤノシラ (左右) テザオ ヨコ (後) カリ カリボウ
	吹散	吹散 富貴千里 富尾 見送 幡 比礼 フキチリ トミオ ミオクリ ハタ ヒレ ヘレン フキナガシ
	ざぶとん	マクラ ザブトン (鍔受の上下、受金の上下に挟む環状の緩衝材)

剣

ただし、これら通用している名称のうち、見た目の形によるものは個体差が激しく、一般化ができないものがあり、部材の役割や性質に由来する呼称を新たに付したものもある。その例をあげると、次のとおりである。



【写真1】下御霊神社 葵鉾 鍔受
(根本裕衣 平成 23.5.23)

鍔受

剣、鍔が差し込まれる中央の「鍔受」は、神社名が書かれた神額(写真1)になっている場合が多い。調査当初は「額」と表記するようにしていたが、吉田神社今宮社の松鉾(写真2)に見られるように、神額がその下の受金部分に相当している例もあり、形状と部材とで名称が混同してしまう事例が見られた。また、下の受金⑤と一体になっているもの、受金が「額」のデザインになっている、上下逆に見えるもの等があり、標準名を「額」とすることは不適切と考え、機能面から標準名を「鍔受」とした。

受金

鋸受と同様に、形状から「スハマ」(州浜) (写真3) と呼ばれているところが多く、それらの地域では「スハマ」「カブラ」と呼ばれるが、前述のように「額」のデザインなど、まったく別の形の形も散見される。そのため、全体を受ける部材としての呼称を優先して採用した。

三 調査方法

調査は、各部材の寸法の測定と写真撮影を行った。調査道具は布メジャー、樹脂製ノギス、竹尺、ばねばかりを標準として、長い棹の測定には光学距離計を用いた。布メジャーや樹脂製のノギスを使用したのは、採寸の対象としたのが木製や金属製のものであり、あたりの柔らかい素材を用いる必要があったからである。採寸結果は、撮影した写真とともに鋸銚調査票に記録した。鋸銚調査票にはいく段階かの変遷がある。まず調査開始前に、京都市の登



【写真2】吉田神社今宮社 松鉾助受金になっている事例 (藪邊悠介、平成25.11.7)



【写真3】下御霊神社 桐銚 スハマと呼ばれる受金 (高岡健二、平成23.5.22)



【写真4】通常は解体しない鋸受も分解した八代神社の龍銚 (伊達仁美、平成23.1.23)

録無形民俗文化財でもある一乗寺八大神社の鋸銚を例に、計測ポイントの検討を行った。この時には、修理前ということもあり、額の金具も分解して、詳細に見せさせていただいた (写真4)。その知見を基礎に、鋸銚調査票を作成した (図2)。このカードでしばらくの間調査を続けていたのであるが、祭礼調査が本格化するに従い当初想定していた数をはるかに超える鋸銚が確認でき、よりスムーズに調査を行う体制づくりが必須となった。そのため、もと現場で書き込みやすいカードを準備する必要性に迫られ、作ったのが現地記入カード (図3) である。現地記入カードは、調査者によって差異が出ないよう、計測箇所や調査としての必須項目を示した。○部分は、厚みを測定する箇所である。

現地記入カードには、組まれた状態で計測するカードと、分解された状態で計測するカードをそれぞれ用意し、現地の状況に応じて調査員が混乱しないように工夫した。鋸銚の多くは、分解して収納されており、祭礼時に組み立てる。所有形態は、個人所有、組や講や仲間などといわれる任意の団体に

図2 剣鉾調査票（記入例）

神社名	御霊神社
地域 組織	徳大寺殿町
鉾名称	紅葉鉾
調査日	
調査者	
調査地	



吹散	全長:	
	幅:	
	材質:	
	色:	

カードNo. 資料No. -
(旧カードNo. (旧資料No.)

使用状況:	管理者:
寄進者等:	保管場所:

各構成部品寸法(mm)

剣	1	長さ	全長(単体):	
	2		剣先～額上:	
	3	幅	最大幅:	
	4		額上(根元):	
	5	厚さ	先端:	
	6		額上:	
	7	スリット	上端～下端:	
	8		スリット数:	
	9		材質(色):	
剣ばさみ	10	長さ	全長:	
	11		竹先～額上:	
	12	材質:	竹 or 竹以外	
鏑	13	縦横幅: 左 864 × 458 右 816 × 458		
	14	分割数:	2	
	15	最大厚さ:	67	
	16	材質(彩色):		
額	17	縦横幅:	371 × 119	
	18	厚さ(奥行):	65	
	19	軸穴の 上:	29 × 43	
	20	縦横幅 下:	27 × 42	
	21	材質(彩色):		
受金	22	縦横幅:	- × -	
	23	厚さ(奥行):	-	
	24	軸穴の 上:	- × -	
	25	縦横幅 下:	- × -	
	26	材質(彩色):	-	
紐	27	くくり	色:	
	28	紐	材質:	
	29		色:	朱
	30	鈴紐	材質:	麻
鈴	31		振り子長:	
	32	全長:	92	
	33	直径:	95	
	34	重量:	0.9	
棹	35	材質(色):		
	36	舌(長さ×径):	64 × 27	
	37	舌の材質:	鉄	
	38	全長:	4848	
	39	上:	204	
	40	円周	鈴当て直下:	212
	41	長	下:	140
	42	軸穴の縦横幅:	30 × 38	
	43	鈴の腕木:	64	
	44	長さ:	242	
45	鈴当て	円周長:	271	
46	材質:	銅		
箱1	幅	身: 222	蓋: 222	
	奥行	身: 939	蓋: 939	
	高さ	身: 150	蓋: 10	
箱2	幅	身: 225	蓋: 225	
	奥行	身: 941	蓋: 941	
	高さ	身: 169	蓋: 45	

意匠	鏑	
	額	
	受金	
	鈴	
	棹	
	吹散	

銘情報	剣	
	鏑	
	額	
	受金	
	鈴	
	棹	
	吹散	
	箱1	蓋表「一條大政所御方 御寄附 御鉾之幡」蓋裏「干時文政六癸未都市七月吉祥日 徳大寺殿町」
箱2	蓋裏「干時寛政九丁巳年口七月吉祥日 徳大寺殿町」	

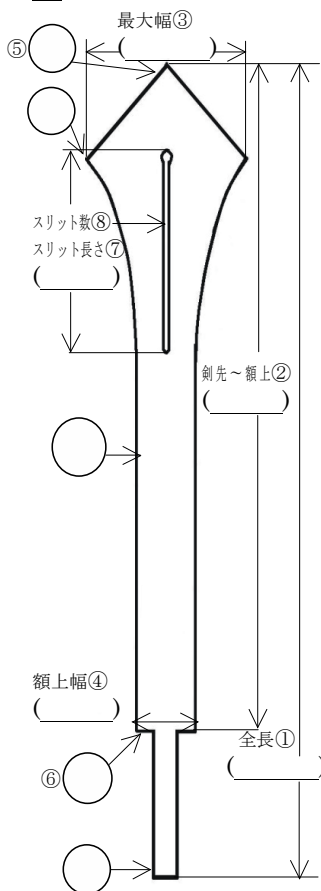
図3] 現地記入カード (分解)

神社

鉾

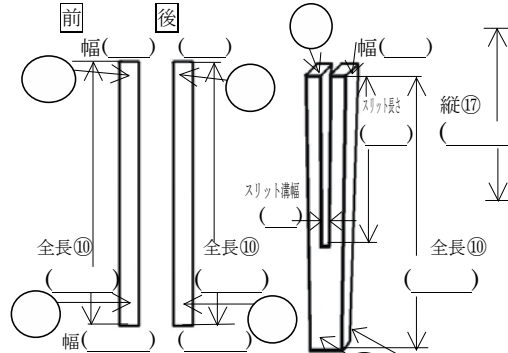
年 月 日 調査者：

剣

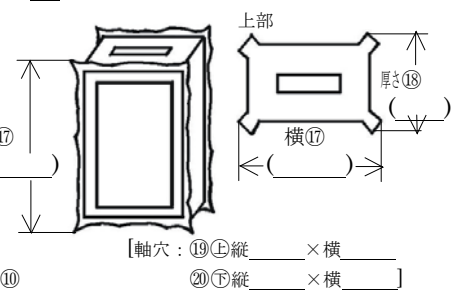


竹・剣ばさみ

[材質⑫：竹・竹以外()]



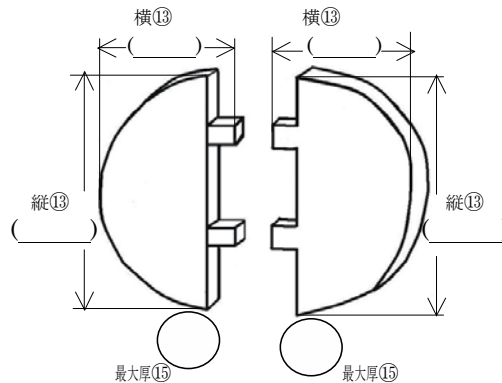
額



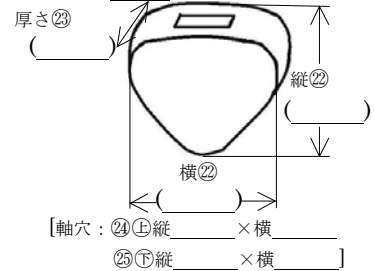
鍔

[分割数：⑭()][意匠：()]

[構造：一枚・合わせ・その他()]

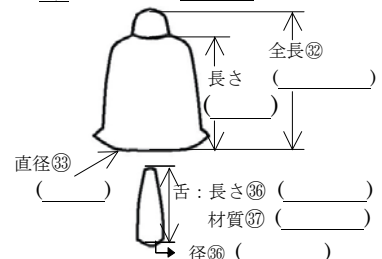


受金



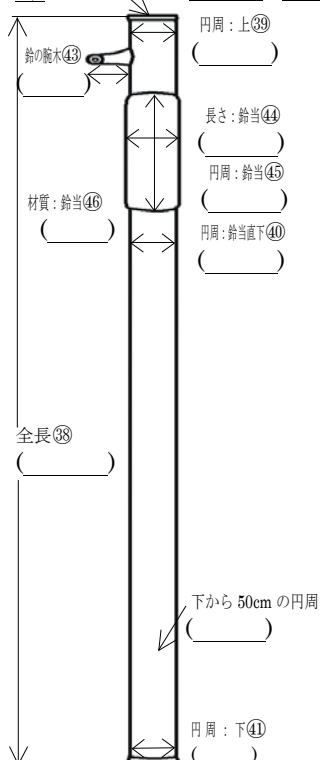
鈴

[重量：⑮④()]

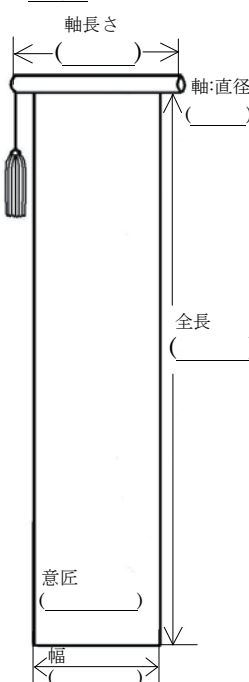


棹

[軸穴縦横幅④② 縦×横]



吹散



紐

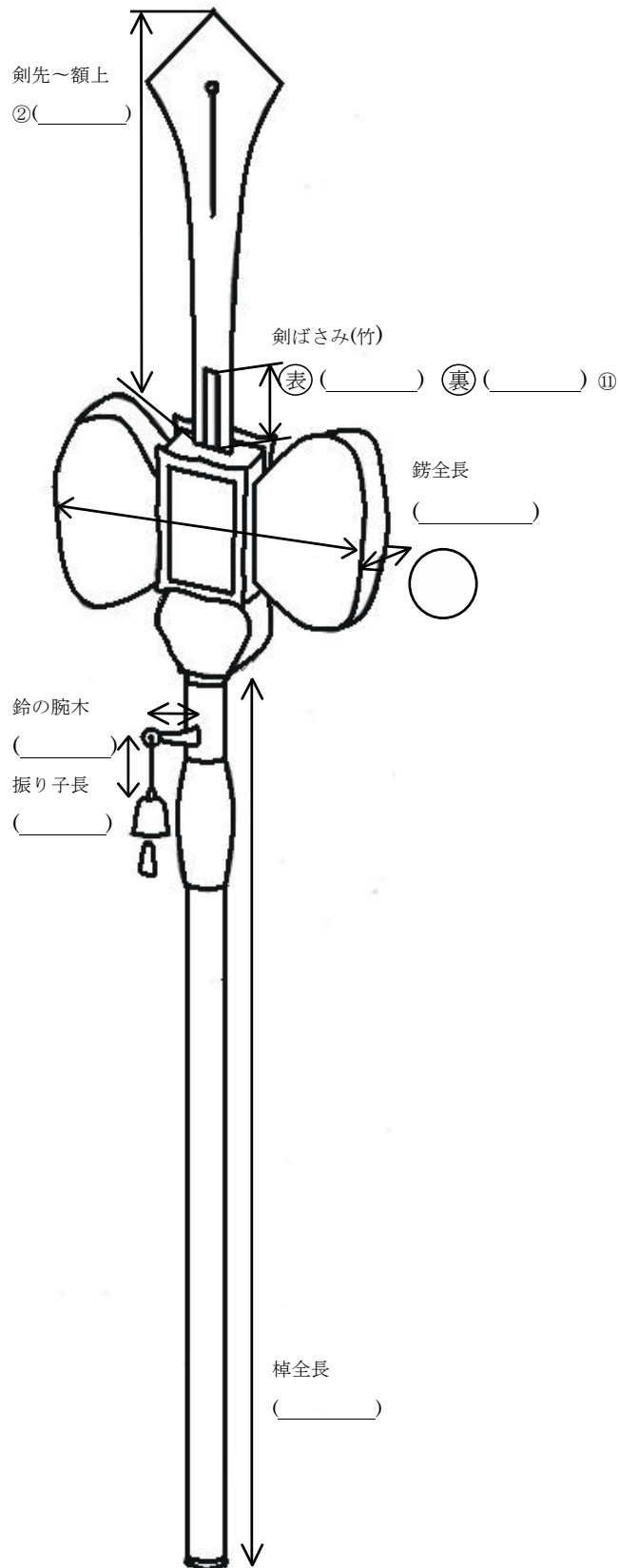
くくり紐：色②⑦() 材質②⑧() 鈴紐：色②⑨() 材質③⑩()

情報

- 注・単位は mm
- 一部材ごとの状態や情報を書き込む。特に年号等の情報は必須
 - 剣に補強等がある場合、その箇所の厚みと剣本体の厚みを測定する
 - 鍔が分割している場合、各飾ごとに測定。その際は裏面に記入する

_____神社 _____ 鉾 _____ 年 _____ 月 _____ 日 調査者：_____

組立時



剣の厚みは、分解時に測る。
 剣袂の竹の長さ、組立時の長さも計測する。
 鈴紐は調整した後の振り子長を計測する。
 により、剣・鈴の振幅周期が分かる。

神社名:	御霊神社
鉾名称:	紅葉鉾
資料No.	—

調査日
調査者

剣鉾状況情報欄

箱③:幅190 奥行845 高さ154 蓋高さ40 「不良 御後目閨覚」の張り紙

箱④:幅195 奥行912 高さ135 蓋高さ50 蓋表「徳大寺殿御寄附」

箱⑤:身幅457 身奥行1180 高さ470 蓋幅454 蓋奥行1014 蓋高さ75

「御吹散 長持一棹 寄附主名 御町中 丁子屋長兵衛 近江屋■兵衛 ■屋■兵衛 下村屋■兵衛 亀田屋三■兵衛 亀田屋新右衛門

楓御鉾 奉獻 享和二壬戌歳 正月新調 徳大寺殿町」

張り紙「御鉾順番次口 壺番 太刀 御霊前之町 貳番 蛇鉾 今出川町 三番 松鉾 武者小路町 四番 菊鉾 玄蕃町

五番 鯨 馬場町 六番 葵 立売八町組 七番 菊 口町 八番 鷹の羽 不動前町 九番 きり 室町頭町

十番 牡丹 上柳原町 十一番 鶴 内構町 十三番 亀 新御霊口町 十三番 紅葉 徳大寺殿町 十一番 轟 内構町

十四番 矢的 柳風呂町十三町組 十五番 鳳凰 上樹之下町 十六番 寶 継孝院町 十七番 柏 中樹之下町 □□□」

剣箱:身 上幅380 下幅146 奥行1666 高さ57 蓋 上幅360 下幅165 奥行1675

「天保九戌戌年七月新調」

棹(旧):全長4691 円周㊦234 円周鈴当直下235 円周㊦161 軸穴の縦横幅30×38 鈴の腕木64

鈴当:縦長さ242 円周長271 材質:銅

棹(新):下から50cmの円周165

鈴(小):全長80 直径75 重量0.5Kg 材質? 舌(長さ×径)52×23 舌の材質?

剣ばさみ① 全長803 スリット369 スリット幅9 上幅28 下幅28 下厚19



剣ばさみ② 全身833 スリット762 上幅22 下幅23 金属部分231 (留具部分上から123の所)



剣ばさみ③ 全身738 スリット530 上幅35 上厚15 下厚16 竹が挟んである



竹①全長740 上幅36 下幅22 上厚5 下厚5.4 竹②全長747 上幅33 下幅23 上厚5 下厚5.5

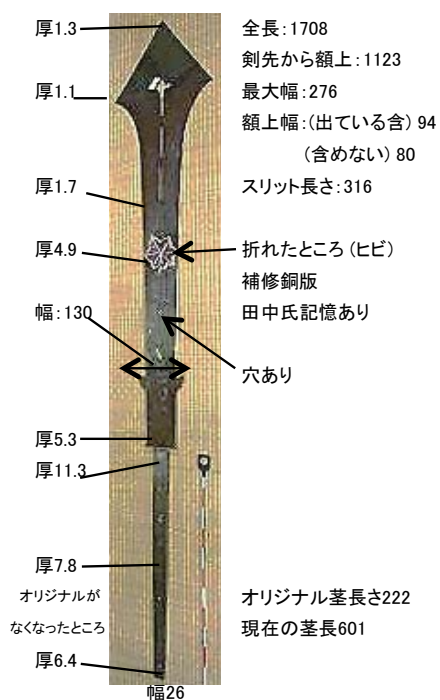


神社名:	御霊神社
鉾名称:	紅葉鉾
資料No.	—

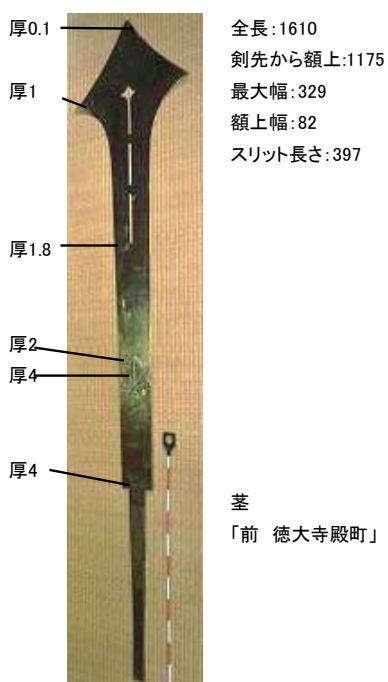
調査日:
調査者:

鉾鉾状況情報欄

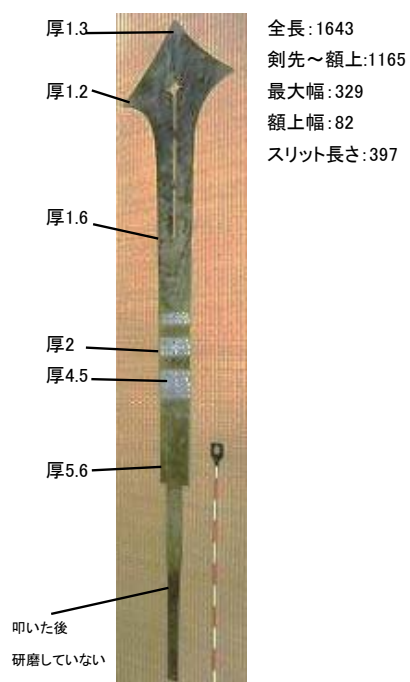
鉾① (お飾り)



鉾②



鉾③



茎
「前 徳大寺殿町」

鉾④ 全長:1740 鉾先~額上:1270 最大幅:327 額上幅:82 スリット長さ:400



神社名： 御霊神社

鉾名称： 紅葉鉾

資料No. —

調査日：

調査者：

剣鉾状況情報欄

吹散① (箱4に入っていた)



全長7570

軸：幅797 直径30

吹散② (箱1に入っていた)



全長7228

軸：幅797 直径33

吹散③ (箱2に入っていた)



全長7535

軸：幅804 直径30

吹散④ (箱2に入っていた)



全長7535

軸：幅804 直径30

「参十五」の張り紙

吹散⑤ (箱3に入っていた)



全長6872 幅700

軸：幅767 直径32

吹散⑥ (箱3に入っていた)



全長8750 幅454

軸：幅613 直径21

「参十七」の張り紙

よる所有、町内で所有、神社所有とさまざまである。組み立て式であるので、調査は、劍鉾が出される祭礼時に、祭礼調査と同時並行で行うことが多かった。祭礼日は何か所もの神社が重なっていることがあり、祭礼の準備や撤収の最中に、所有者の間を廻って、無理を言って計測させていただくことを繰り返したのである。

また、劍鉾の形状の多様さを反映するためには、統一的な計測フォーマットに加えて、それぞれの劍鉾の個性を書き出す必要性があった。例えば、茎や剣身で継いでいるものについては、その継ぎ部分の厚みや長さなどを詳細に計測した。よって劍鉾調査票への統一的な記載に加えて、個別に計測した箇所を写真に記して反映している。もちろんこうしたことは、劍鉾の個性によるというだけでなく、調査の実務的な制限、逆に余裕も反映している。そうしたことは、劍鉾調査票の二枚目以降に写真や図とともに記録した(図4)。これら個別の劍鉾調査票は本報告書に掲載しなかったものの、今後の研究の深化を待ため本報告書付録のデータディスクにPDFファイルとして収載した。

資料編第九章「計測数値」では、計測データの解析用の表を掲載している。これらのデータは今までの祭礼調査に加えて民具学的手法により集積したデータである。今回の調査成果を表にしたものであることは間違いないが、先述の個別の劍鉾調査票に記載したデータのすべてを反映したものではないことを付記しておきたい。あくまでも今回の調査によって得られたデータから解析に必要なデータを抽出した表であり、その詳細は資料編第九章の解説を参照されたい。本計測調査の成果を活用し、祭礼民具の特殊性に着目した研究の可能性に期待している。

四 計測調査から見えてきたもの

計測調査では、劍鉾の寸法の計測のみならず、構成部材に刻まれている刻印や墨書、それらを収納している箱、そこに書かれている墨書なども情報として記録した。本調査から見えてきたものを踏まえて、今後の課題とした部分も多い。

剣について

剣は、シルエットは同じであるが、長さや厚みについては数値の個体差があり、長さや厚み、スリットの寸法は、しなりに関係することが分かった。東山の剣は、他の地域と比較すると長い傾向にある。厚みの測定については基本は三か所であるが、必要に応じてそれ以上の測定を行うこととした。茎を測定することで、使用した真鍮材の本来の厚みが分かる。この厚みの真鍮を鍛造し延伸していくと考えられる。根元から剣先に向かって薄く延ばすことで、振るための支点の位置を低くし、なおかつ先端が薄いことで差した際の美しさを目指しているのではないだろうか。また、測定した剣の中には、茎から先端まで厚みが均一、もしくは変化が少ないものもあり、これらは、差すことができない、すなわち、差すための剣ではないことが分かった。

剣挟について

剣挟は、剣を固定するものである。この項目では材質にも着目した。剣挟は、タケと呼ばれているものもあり、多くの劍鉾ではしなりやすい竹が使われている。しかし中にはカシ材などの堅木が用いられているところがある。これは梅ヶ畑、嵯峨、鞍馬で用いられていることが多く、これが差した際の

しなり方や差し方と関係があるのではないだろうか。

また、組んだ状態で計測した場合、額上から剣挟の上端までの寸法を測定することで、剣をしならせるための支点の位置が分かる。

鍔について

鍔には、一枚板で構成されるもの、分割できるもの、立体的なものがある。これを調査することで時代的なことが分かると思われる。

モチーフには、木や草花といった植物、動物、器物など様々なものが用いられており、剣銚の名称もその鍔からつけられていることが多い。中でも菊は、様々な角度からモチーフに使用されており、全体の約10%を占め、菊を含めて植物をモチーフにした鍔は、全体の約40%を占める。その他、牡丹、松、柏、葵、鷹羽、橘と続く。動物では龍、器物では扇が比較的多い。

額と受金について

この項目では、それぞれの軸穴の寸法に着目した。その寸法から剣の茎の厚みと剣挟の厚みが分かる。数値が大きいものは、現在は竹を使用している剣銚でもかつてはカシ材を用いていたことが考えられる。そこから差し方の変化を推測することができる。

鈴について

釣鐘型のものが多いが、中には絵画資料『風流祭祀図屏風』（千葉市美術館蔵）に描かれている、剣銚の鈴に使用されている仏具である五銚鈴を使っているものもあった。計測調査では、差し方に関係があると思われるため、鈴の重さも測っている。

鈴の材質は青銅製であるが、舌は鉄製のものも多く、後補の可能性が考えられる。

棹について

基本的にヒノキの芯去りで作られている。それに漆を塗り、螺鈿や蒔絵、鍔金具などで装飾が施されているものが多く、銚差しが差すために持つところあたる部分は、滑らないよう漆の塗り方が工夫されている。

長さでは、東山が他の地域よりひときわ長い。これはしならせながら進むためであり、同様に剣の寸法も長いのが特徴である。嵯峨は太く作られている。これは、棹を軸に大きく左右に回転させるため安定感が必要なのではないだろうか。

今は差されていない銚の棹もトウヤ飾りをする際に、木の枠を作り、入り口に飾られている例がある。また、枠作りで巡行する銚については、棹が短く切られている例も見受けられた。

五 剣の材質について

現在、銚差しが行なわれている剣銚の剣は真鍮製がほとんどである。黄金色の剣がしなつて光輝くことで疫神を集めると言われている。真鍮は銅と亜鉛の合金で、塑性変形しにくい金属である。故に現代産業においてはバネなどの適材として使用される。東山のように、しなる動きを利用した差し方であれば、物性という観点の上でも真鍮を使用するのは理にかなっていると言える。剣銚という祭具が動態を伴って形式化しているとすれば、「材質」というアプローチからも考察の余地がある。

真鍮について

真鍮は前述したように銅と亜鉛の合金である。黄銅とも呼ばれる。銅が多いと柔らかく、亜鉛が多いと硬い仕上がりとなる。これを剣鉾に当てはめると、柔らかければ差した際にしなりすぎて戻る力がなくなり、逆に亜鉛が多いと硬いため、しなりがでない。亜鉛は亜鉛鉱石から精錬する必要があるが、亜鉛の融点は四一九度と他の金属より低く、九二三度で沸点に達してしまい、気化すると酸素と結びついて酸化亜鉛になる。精錬するには、亜鉛鉱石を密閉した容器にいれて沸騰させ、昇華したものを集積しなければ亜鉛単体を得られない。単体で亜鉛を精錬する技術が無かった時代は、天然の亜鉛鉱石を銅と一緒に溶解させて真鍮を作り出していたのだが、銅の融点は一〇八四度のため、銅を融解させておいてから亜鉛鉱石を投入しなければ、亜鉛は気化して消失する。このような理由から、天然鉱石を使った真鍮は亜鉛の絶対量が少なくなる傾向がある。

亜鉛を単体で精錬する技術が確立されたのは十五世紀のインドといわれ、十七世紀になって中国で量産的な亜鉛製造が確立された。一六三七年、明時代宗愍星が著した『天工開物』^①には、亜鉛鉱石を密閉した坩堝（ろ）に入れ、焙焼して亜鉛単体を取り出す方法が書かれ、このころから亜鉛製造、真鍮製造が普及されていくことになる。^②

日本においては、正倉院宝物で真鍮製の香炉や合子があることが確認できるが、大陸からの渡来した宝物であるため、日本での真鍮生産は十六〜十七世紀、京都で生産が始まるまで輸入する状況であったことが考えられる。

京都で真鍮製造が始まったという起源説は、滋賀広徳寺の『真鍮吹始由来』にある。^③藤左衛門という人物が文禄二年（一五九三）に家運の隆盛祈願で断食祈願したところ、十七日目の夜に童子が夢にあらわれ「銅に鉍丹（亜鉛

を混ぜて吹き流せば黄金の金を得られる」という合金法を授かったという由緒を載せている。また同書では京都で真鍮吹が始まったのは慶長四年（一五九九）としている。

『真鍮吹始由来』はあくまで伝説であるが、元和元年（一六一五）、信濃大名堀丹後守直寄が近江日野の鉄砲職人に命じた注文書に「かなこしんちう上々、但、いづれも丈夫に可仕候」と、鉄砲の仕様に真鍮が使われていることから、同時期に真鍮製造が行なわれていたことが伺える。^④

真鍮吹の記録では、延宝六年（一六七八）の『京雀跡追』や、元禄二年（一六八九）の『京羽二重織留』^⑤が挙げられ、「しんちうや、真鍮屋」、「真鍮問屋」と紹介されているところを見ると、江戸中期に入る頃には吹屋による生産体制が整っていたのは確実であろう。

本調査では、剣自体に製作年が刻まれている剣は八十五本あった。その中で一番古いものは、延喜八年（九〇八）の北白川天神宮の壱ノ鉾（黒鉾）であるが、これは鉄製である。真鍮製では、正保三年（一六四六）の長谷八幡宮の扇鉾が古い。この年号は茎に刻まれており、かつ茎部分は銅に鍍金がされている。茎を除いた剣部分のみが真鍮であり、茎と剣の接合の仕方からも剣が後補である可能性は拭いきれない。

次に古いものは、明暦二年（一六五六）の北白川天神宮の式ノ鉾である。しかし茎に刻まれた年号は、鋳職人が製作の際に刻んだものではなく、細く弱々しい。そのため、この年号自体に疑問が生じる。

次に大豊神社の龍鉾には、寛文十年（一六七二）と延享三年（一七四六）という年号が剣に刻まれている。前者は剣の由来書きであり、この剣が製作されたのは、延享三年（一七四六）だと思われる。

実際に剣に刻まれている年号は、十八世紀中ごろから突然多くなる。おそ

らく真鍮が日本で安定供給され始めた年代と重なっていると思われる。蛍光エックス線分析による金属配合比を調査したところ、多くの剣は銅に対して三十〜四十%の亜鉛を含んだ真鍮が用いられていることが分かった。この割合は、真鍮として最大の伸長性を持ち、色も金色に輝いて美しい。

以上、真鍮の歴史を紐解いてみれば、その歴史から剣鉾の時代性に触れられるのではないだろうか。

まとめ

当初、剣鉾の「寸法測定」から始まった計測調査は、剣鉾のあらゆる情報を記録するものに変化していった。剣に刻まれた銘や、箱に記された紀年銘、墨書、さらには真鍮の配合比から、差し方等、祭礼の形態が見えてくることが考えられる。

このように計測調査は、従来行われてきた祭礼調査の民俗学的なアプローチとは異なった視点に立ち行ったものである。各情報を精査し、分析することにより、今後の剣鉾研究の広がりにも寄与できるものとなった。

(京都造形芸術大学教授)

(付記) 本報告は、科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金(挑戦的萌芽研究)「剣鉾の製作技法に関する研究」(代表 伊達仁美)の成果の一部を含んでいる。

註

- (1) 宋応星(穀内清 訳注)『天工開物』東洋文庫百二十、一九六九年
- (2) 森本芳行『黄銅の歴史』一九八六年
- (3) 日本伸銅協会『伸銅工業史』一九六七年
- (4) 産業新聞社編著『近代日本の伸銅業 水車から生まれた金属加工』二〇〇八年
- (5) 新修京都叢書刊行會編『新修京都叢書』第二巻、一九六九年

劍鉾の構成と動態 — 地域性と時代性に着目して

溝邊 悠介

はじめに

京都市では昭和五十九年度、六十年年度の調査で百七十七基の劍鉾を確認している。平成二十三年度から始まる今回の調査では、民俗調査に並行してモノの調査として計測調査を実施し、市内五十四の社寺で約三百基の劍鉾を確認した。計測調査は各劍鉾の部材構成、それぞれの寸法、収納箱、銘文、付随する道具などを計測記録し、京都市内における劍鉾の基礎データ作成を主とした。

劍鉾が他の祭具と違う点として、「差す」という動態が挙げられる。祭礼行列において、七メートルほどになる劍鉾を、差革、差袋などと呼ばれる帯に差し、剣をしならせ、鈴を鳴らしながら巡行することを「鉾差し」という。

調査を進めていくなかで、鉾差しの動態が劍鉾の形態に与える影響が大きいことがわかった。本稿は、モノとしての劍鉾に対する調査で得られた銘文情報および計測データを用いて、劍鉾の製作における歴史的な変遷を整理し、劍鉾を「差す」という動作にかかわる地域性について考察することを目的とする。

一 劍鉾の銘文と製作者

計測調査では、劍鉾の各部材寸法のほか、モノに直接記された銘文や、劍

鉾が収められる箱の箱書きについても記録してきた。本稿では、それら銘文情報の一覧から、特筆すべき項目について述べていきたい。

銘文からわかる諸情報

モノに直接刻まれた銘文は、劍、鐙、鐙受、受金、鈴、棹に確認することができ、総数は百三十五基である。さらに、箱書きなどで残っている銘文は百六十三点確認できた。

劍（劔、劔先、まねき、おいで）は「劍鉾」の名の通り、構成部材の中でも重要な位置づけがなされる部分である。多くの劍は真鍮で作られているが、巡行中はしなる運動を繰り返すことから、金属疲労を起しやすい部分でもある。いわば消耗品であるので、毎年巡行を続けていけば、修繕や新調が繰り返されることが十分考えられる。劍の茎には、紀年銘、製作者銘、寄進者銘が刻まれている場合があり、今回の調査では七十二本の劍に紀年銘が確認できた。劍の紀年銘を、本稿の末尾「表1」にまとめた。七十二本の傾向を見ると、製作年代は江戸後期が最も多く、三十三本が製作されている。劍の紀年銘について最も古くまで遡れるものは、北白川天神宮の壺之鉾仲間が護持する「黒鉾」である。延喜八年（九〇八）の銘を持つが、材質は鉄であり、しなる劍鉾とは系統を異にしている。

黒鉾に次いで古い銘は、長谷八幡宮の扇鉾で、茎に正保三年（一六四六）の銘がある。茎は目視でも銅地に鍍金されていることが確認できる。鐙受にも正保三年の銘文がみられることから、それが新調された年代とみてよいのではないだろうか。劍は真鍮でできており、茎に挟み込まれて鉾止めされている。このことから正保三年のオリジナルの部分は、茎の部分のみの可能性が高い。このように、長谷八幡社の扇鉾は後補痕があるため、製作時の姿を



【写真2】紫野今宮神社葵鉢
元禄七年銘



【写真1】北白川天神宮式之鉢
明暦二年銘



【写真3】京都ふしみの神社専山の神輿鎧

完全には確認できない。

一材できていてオリジナルとして考えられるなかで最も古い剣鉢の剣は、北白川天神宮の式之鉢で明暦二年（二六五六）の銘がある（写真1）。次には、今宮神社の葵鉢の元禄七年（二六九四）の剣であろう（写真2）。しかし、北白川天神宮の式之鉢の「明暦二年」の文字はかなり稚拙な刻みである。通常、剣に刻まれる銘文は毛彫りで刻まれているのが一般であるが、北白川天神宮の式之鉢の剣は、けがき針で何度かなぞったような痕で紀年銘が刻まれている。後から刻んだようにも見えるため、注意が必要である。一方、元禄七年の今宮神社の葵鉢は、後補痕もなくオリジナルの剣として確実視できる。

作者である鋳師

紀年銘を並べてみると、江戸時代中期から後期にかけて剣の製作が盛んであった様子をうかがい知ることができたが、次に、鋳なども含め、製作者についてまとめる。本稿の末尾「表2」は、製作者の名前を抽出した表である。製作者はいわゆる鋳師で、その数は三十五人にのぼる。複数の剣鉢製作に関わっている人物を中心に分析した結果から、明らかにしたこと挙げていきたい。

① 丸屋浦井庄左衛門

製作者銘で最もよくみられるのは、「浦井庄左衛門」「丸屋庄左衛門」である。紫野今宮神社の柏鉢の剣には「鋳師 建仁寺門前 丸屋 浦井庄左衛門」とあるので、丸屋が浦井の屋号だとわかる。

剣では計十四本に名が記され、箱書きなどと合わせると十八基の剣鉢が確認できる。その製作時期は天明三年（一七八三）から文政十二年（一八二九）の、四十六年間である。紀年銘全体でみても江戸後期は多くの剣が製作されているが、浦井庄左衛門銘の剣は御霊神社や栗田神社に多く残されている。銘文の中には「建仁寺門前」「建仁寺町松原上ル」と住所も記されるが、『商人買物独案内（天保二年版）（一八三二）』などでは確認することができない。また、浦井庄左衛門が工房を構えた建仁寺門前にあたる、京都ふしみの神社氏子域の博多町には浦井庄左衛門が手掛けた鳳凰の神輿鎧が残されている（写真3）。この神輿鎧には寛政十年（一七九八）の銘がある。

なお、大豊神社の神輿鎧にも、浦井庄左衛門の製作を証明する箱書きが認

められるようだが、今回の調査では確認できなかった。

② 鉢阿弥

下御霊神社の重菊鉾の剣に刻まれている鋳師「鉢阿弥」は、文献史料でも確認できる鋳職人である。この剣には「天保五年」（一八三四）と刻まれており、ほぼ同時期の史料である『商人買物独案内（天保三年版）』（一八三二）では「禁裏御所御用 御鋳所 堺町竹屋町上ル町 鉢阿弥権兵衛」と記載されている。その住所は現在の中京区橋町で、下御霊神社の氏子地域である。

③ 堀井新兵衛

住吉大伴神社、上中八幡神社の剣は「堀井新兵衛」の銘があり、同一の製作者がつくった剣である。それぞれ「明治二十五年」「明治三十二年」の紀年銘が刻まれる。ともに鋳箱や剣箱にも同じ紀年銘があることから、剣鉾一式を新調した時期と考えられる。

福王子神社の常盤鉾の鋳箱には「明治八年乙亥十月吉日 西京一條通淨福寺西入町 細工所 鋳師堀井新太郎」の墨書がある。また、由岐神社名主仲間が護持する四本鉾の受金には「昭和四年 拾月吉日 修覆」「京都 大宮一条 鋳師堀井新」の墨書があり、これも堀井新兵衛である可能性が高い。

この堀井新兵衛は、現在神輿鋳などを手がける大柳製作所（上京区榎町）の創始者である。同社によると堀井親兵衛は、明治初期に大宮一条で「鋳新」という屋号で鋳細工所を始めたとされており、計測調査で得られた時期・住所とも一致する。福王子神社の福王子鉾の部材の一部には、「平成丙戌十八年十月吉日 福王子地区奉賛会 製作 大柳製作所 上京区榎町」という銘文が刻まれている。

④ 柳原栄三

柳原栄三の銘は北白川天神宮の式之鉾、下御霊神社の重菊鉾、須賀神社の

剣鉾、同葛蒲鉾、吉田神社今宮社の松鉾、天道神社の龍鉾の剣にみられる。

これらの紀年銘からは大正十一年から昭和十一年の時期に剣を製作しているのがわかる。さらに、春日神社の式番鉾の古い受金木組には「明治三十四年九月 二條寺町西^江入鋳師柳原栄三」とあり、活動期間は明治三十四年まで遡ることができる。

⑤ 森本安之助

森本安之助または森本鋳金具製作所の銘は六本の剣にみられる。愛宕・野々宮神社（嵯峨谷）の菊鉾、平岡八幡宮の一之瀬鉾、中島鉾、善妙寺鉾、平岡鉾であり、平岡八幡宮については全ての鉾に関わりをもっている。三代目森本安之助による、国分綾子編『鋳師森本安之助』（一九七〇）によると、初代森本安之助は、引き手問屋の仕事から始まったという。鋳金具の仕事は、高台寺の隣にある日露戦争の忠魂堂が始まりとされる。二代目森本安之助は明治二十七年生まれで、大正四年に二代目を継いだ。宮内省、伊勢遷宮、国会議事堂御便殿、文子天満宮神輿、放下鉾などを手がけ、職人も二十人以上となった。三代目森本安之助は、昭和四十四年に三代目を襲名した。平成二十二年に四代目が跡を継ぎ、今に至る。

⑥ 七郎兵衛

紫野今宮神社の柏鉾の剣には、「寄付／大和屋茂左衛門／宝暦十二壬午年五月吉日」「柏鉾御剣／細工人 今宮／鋳師 七郎兵衛」の銘文が刻まれている。この七郎兵衛と同じ名が、同じく紫野今宮神社の沢瀉鉾を護持する上善寺町の文書にもみられる。京都市歴史資料館蔵「上善寺町文書」の中に剣鉾の棹の見積り書が残っており、文化七年に上善寺町、梶井宮、役所に宛てている。見積り書の仕様を見ると、真鍮下地に銀メッキ、沢瀉唐草の模様を毛彫りで拵えるなど、現存する棹と同じ仕様であることがわかる。

二 劍鉾の制作年代と製法

御香宮の劍鉾の製作年代と寄進者

御香宮の棹には、元禄七年から九年にかけて寄進者の名前が刻まれている。御香宮には九本の劍鉾が現存しているが、初めから九本揃っていたのではなく、年を追うごとに増えてゆく過程がみてとれる。「壹番」の銘がある棹には「元禄七丙戌歳九月吉日／御香宮伏見住／竹元五兵衛正治」とあり、元禄七年では一本だけであつたのが、元禄八年に「二番」「三番」「四番」「五番」が加わり、元禄九年に「六番」以降「九番」までが加わっている。注目するのは元禄八年の四本がいずれも「武州江戸之住」とあり、江戸に住む磯田氏からの寄進であることである。

劍の銘文と箱書きとの関係

ここでは、劍銘文と劍箱書きとの関係性に注目したい。劍は一本ごとに専用の箱がつくられることが多いが、劍の紀年銘と箱書きが一致する例は限られている。劍と劍箱それぞれに紀年銘があるのは二十五例であるが、そのうち劍と箱書きの紀年銘が一致するのは、八神社二之鉾、御霊神社紅葉鉾、住吉大伴神社劍鉾、下御霊神社重菊鉾の四例である（表1）。また、劍のほうが古い事例は十四例、箱書きのほうが古い事例は七例あつた。

劍鉾を新調した際、一式が欠落することなく残されている事例もある。モノに刻まれた銘文と、モノを収納する箱書きが一致する場合である。一式が同時期に新調されていれば、劍鉾の製作年といえるのではないだろうか。今回の計測調査では、住吉大伴神社、上中八幡神社が該当する。

劍の材質の重要性

鉾差しによる巡行が行なわれている劍鉾の劍は真鍮製がほとんどである。黄金色の劍がしなつて光り輝くことで疫神を集めるといわれている。真鍮は銅と亜鉛の合金で、塑性変形しにくい金属である。故に現代産業においては、バネなどの適材として使用される。後で述べる東山系の鉾差しのように、しなる動きを利用した差し方であれば、物性という観点の上でも真鍮を使用するのは理にかなつていえるといえる。劍鉾という祭具が、動態を伴つて形式化しているとすれば、「材質」というアプローチからも考察の余地がある。

真鍮の生産

真鍮については本報告書のなかで伊達仁美氏が述べているが、ここでも簡単に触れておきたい。真鍮は、銅と亜鉛の合金であるが、この亜鉛は融点が四一九度、沸点が九二三度と、他の金属よりかなり低い特性を持っており、精錬に技術を要した。そのため、亜鉛を含む鉱石から亜鉛を単体で抽出する技術が確立されたのは十五世紀のインドといわれ、その量産化は十七世紀の中国で可能になったとされている。明代に宗応星が著した『天工開物』（一六三七）に、密閉方式による精練方法が示されており、これは世界的にみても、先進的な技術であつた。つまり、真鍮の安定供給の背景には、亜鉛精錬の技術的な進化があつたと考えられる。

最先端の祭礼文化としての真鍮の劍

日本での真鍮利用の記録は、室町時代初期に玄慧法印が著したとされる『喫茶往来』や『室町殿行幸御飾記』（一四三二）などの喫茶の記録にみられる。『喫茶往来』では、「立鍮石香匙火箸」と記され、鍮石すなわち真鍮の記録が

認められる。喫茶の場である会所で、唐物すなわち鑑賞用の海外からの輸入品として、真鍮の香炉などが飾られていたことがうかがえる。

中国で亜鉛の量産化が始まった頃、日本でも鉄砲技術の一環として真鍮が製造されている様子がみられ、十七世紀後半には京都に真鍮屋や真鍮問屋があったことは、注目に値する。

つまり、黄金色に輝く真鍮は、当時難しかった最先端技術の産物であった。現代において、劍鉾という祭礼文化が京都を中心に伝承されているという事実は、近世初頭に京都で真鍮生産が始まり、それが時を移さずに町民の祭礼に取り入れられていったという一端を表わしているのではないだろうか。

三 鉾差しの技能の地域差

鉾差しの技能とモノとしての劍鉾との関係をみていくために、まずは京都市内の春季・秋季祭礼でみられる「差す」という技能を系統別に整理したい。

鉾差しの分類について

鉾差しについて言及したものとしては、京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会編・発行の講演録『京都の劍鉾まつり』(二〇一二)がある。

同書の中で、出雲路敬直氏は鉾差しを三系統に分類している。東山を中心にした地域に多くみられる差し方を「東山系」、梅ヶ畑や嵯峨でみられる差し方を「西山系」、鞍馬のように四本の棹で差すのを「鞍馬系」と分類している。

また、高島孝佳氏は、西山系のなかでも梅ヶ畑と嵯峨の差し方は足の運び方に共通項が見出せるとしながらも、嵯峨が独自に発展した差し方であると分析し、梅ヶ畑、嵯峨と分類を分けた。さらにその形態から、御香宮や金札

宮の劍鉾を、「伏見」という一群に分けている¹⁾。

今回、計測調査に伴い各地の差し方を見学した上で比較検討した結果、高島氏の分析の通り、西山系と呼ばれていた梅ヶ畑と嵯峨は、それぞれ独自の差し方と判断し、鞍馬、東山とあわせて市内の差し方の違いを四つに分類した。「梅ヶ畑」、「嵯峨」、「鞍馬」、「東山」の四分類である。高島氏が提示した「伏見」は、モノとして他地域と差異がみられたものの、現在鉾差しがおこなわれていない以上、鉾差しの系統立てには難しいと判断し、分類には含めなかった。伏見のモノとしての比較は後述することとする。各地の差し方の分類については、京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会編・発行『京都の劍鉾まつり2』(二〇一二)において、拙稿「劍鉾の差し方と差革」で部分的に述べている²⁾。また本報告書においても、福持昌之氏が詳しく触れているので、ここでは構成部材との考察に必要な各地の特徴について簡単に解説しておきたい。

東山の特徴

東山の差し方は、前後方向に剣がしなる差し方で、前方に大きく剣をしなせるところが特徴である。また、剣の振幅に合わせ鈴の振子長さを調節し、剣と鈴の振幅を同期させることによって、鈴を周期的に一定のリズムで鳴らしている。左足のみ蹴り出すことで、鈴は左後方から右前方へと斜めに振れ、鈴当てに当たりながら上から見た時に∞の字に近い軌道を描く。剣が前に大きくしなる慣性の力を利用しながら、さらに足を前に持っていく進んでゆく。鈴は棹の腕木によって前方に突き出て吊るされているので、鈴当に当たる場所は、前後の軌道でいうと中心から後方にずれた場所にあたる。このため、鈴は「チリンチリン」という二連撃の音となる。東山の鉾差しの



〔写真4〕東山（溝邊悠介, 平成24.10.8）



〔写真5〕梅ヶ畑 平岡八幡宮の鉾差し
（藤原喜美子, 平成23.10.9）

視線は常に上方の剣をみつめ、鉾全体のバランスをとりながら巡行する。

現在、鉾差しが行われている祭礼で東山に分類される事例は、大豊神社、八大神社、須賀神社、新日吉神社、下御霊神社、吉田神社今宮社、西院春日神社、北白川天神宮、栗田神社が該当する。

梅ヶ畑の特徴

梅ヶ畑は東山のように剣を前後にしならせる差し方である。しかし東山のような、剣が前側だけに大きくしなる様相は示さない。前側にしなるのと同じ分、後ろにもしなるため、剣は東山に比べて短い周期の振幅を繰り返す。東山の足の運び方が、右足を踏み出しつつ左足を蹴り出すのに対し、梅ヶ畑は左右交互に踏み出す。足を前に出すたびに、身体も差し出す足の方向に向くため、鈴は鈴当の前方部左右に当たり、「チリン、チリン」という単発の一定の周期音が生じる。鉾差しの視線は東山のように剣を見ることはなく、正面を向く。

平岡八幡宮の一之瀬町、平岡町、中島町、善妙寺町が該当する。

嵯峨の特徴

嵯峨の差し方は、棹を中心軸にして身体ごと左右に回転させる差し方で、棹に身体を密着させ抱えるように持つ。前に出した足を軸足として、棹ごと身体をねじるため、飛び跳ねるようなステップを刻む。梅ヶ畑と同様、視線は上を見ずに正面を向く。剣のしなりは鈴と同期せず、鈴は遠心力によって左右方向に振れ、鈴当の後側に当たる。よって嵯峨も梅ヶ畑と同じように単発の一定の周期音が生じるが、その差し方の特徴から、梅ヶ畑より鈴の音の間隔は長い。でんでん太鼓、または雅楽の振鼓を思い浮かべていただきたい。剣のしなりはランダムになるので、あまり重要視されていないが、鋸の両端にくぐられた房が遠心力でより外に広がるほうが、よい差し方とされている。

嵯峨祭（愛宕神社・野々宮神社の大門町、中院町、島居本町、天龍寺地区、四区が該当する。



【写真6】嵯峨 嵯峨祭・麒麟鉾（鳥居本町）の鉾差し
（溝邊悠介，平成23.5.22）



【写真7】鞍馬（藤原喜美子，平成23.10.22）

この五地区の中でも足の上げ方には差異がみられる。天龍寺地区の差し方は、あまり足を上げないため、足の運びだけをみれば梅ヶ畑に近い差し方ともいえる。また、足を上げない分ステップも早く、鈴の音の周期も短い。

鞍馬の特徴

鞍馬では、四本鉾と呼ばれる鉾と二本鉾と呼ばれる鉾の二種類が存在する。

四本鉾は、鉾頭が付くオヤバシラに左・右・後の三本の支持棒が括り付けられ、鉾頭を頂点に、四角錐のような形でお互いバランスを取り合いながら支持する差し方をする。オヤバシラの鉾差しから見ると、オヤバシラは後ろに傾けて持ち上げられるので、棹が肩にかかる格好になる。オヤバシラの石突より少し高い位置に水平方向に取り付けられた横棒があり、差し手はその横棒を握る。鈴を鳴らすのはオヤバシラではなく、後ろを支えるカリボウの役目である。カリボウを突き上げる動作によって鈴が鳴らされる。よって鈴の音は一定の周期音というよりは、掛け声にあわせたカリボウの動作によるものとなる。

のとなる。剣は突き上げ動作にあわせて前後に振れる。鈴は、オヤバシラから見ると後方に下がっているため、鈴当後部にあたることになる。

一本鉾は他の地域での所謂剣鉾と同様の鉾であるが、鉾差しは差革を用いず、両手のみで支持する。巡行中は片足を前に出し、後ろの足を引き付ける際に両手で勢いをつけて鈴を鳴らす。剣は前後方向に細かく振幅する。また御旅所では、棹を地面におろした状態で前後に振って鈴を鳴らす。

由岐神社（鞍馬火祭）の僧達仲間（四本鉾、名主仲間（四本鉾、上大惣仲間（四本鉾、中大惣仲間（四本鉾・二本鉾、下大惣仲間（四本鉾・一本鉾、大工衆仲間（二本鉾）が該当する。

四 鉾差しの技能と剣鉾の関係性

剣挟の役割と地域差

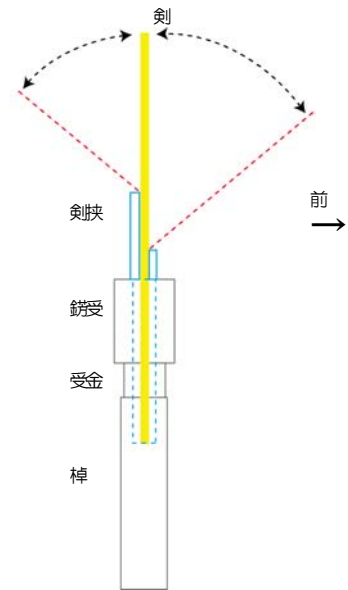
これらの差し方の違いは、剣鉾の構成部材や寸法にも影響を与えていることが、計測調査結果からみえてくる。

まず、構成部材での違いをみてみると、剣挟において地域の違いが表れる。東山は剣をしならせるために、剣を固定する剣挟は竹を使用し、前側の竹を後側より短くすることで、前側の支点の位置を下げ、前側に大きくしならせることができるようになっている（写真8）。剣挟は剣と銚受との間に入る緩衝材であると同時に、長さによって支点の位置を調整し、剣の振幅周期を



【写真8】東山 剣挟の長さ調整
(溝辺悠介, 平成 23.4.29)

【図1】東山 断面概略図



剣の長さの比較

東山、梅ヶ畑、嵯峨、鞍馬のグループごとに、それぞれ剣の各部データと棹・鈴のデータをまとめたのが「表3」から「表6」である。

現在、東山の差し方をしていいる地域の七十一基（剣のみの事例を含め八十六本）の剣全長の平均は一七七五ミリメートル。梅ヶ畑は九本で平均一五一五ミリメートル、嵯峨では十一本で平均一四七六ミリメートル、鞍馬は五本で平均一四三〇ミリメートルとなり、東山とその他地域とは全長で三〇〇ミリメートルほどの差が表れる。しかし、剣銚を組み立てた際、鍔受から上の、外から見える部分の長さでは、各地域を比較しても一四〇ミリメートル程度の差にしかない。この数値はどういったことを表しているのだろうか。

決める部材でもある。

東山以外の梅ヶ畑、嵯峨、鞍馬では、剣挟に檜の角材に切り込みを入れたものを使用している。切り込みの部分に剣の茎が収まるのである。剣の支点位置に重要性がなく、調整材というよりも固定材としての役割が強いために、前後の支点位置が同じ一材のものが用いられる。これは東山の銚でもみることができ、東山ではあくまで巡行用ではなく、留守銚に用いられている。

鍔と鍔受の接合方法

剣以外のデータでみると、嵯峨の場合、鉛直方向を回転軸にするため、鍔が紐でくくられるのみだと遠心力で飛ばされてしまうおそれがある。そのため、鍔と鍔受はボルトでしっかりと固定されていることが特徴である。

梅ヶ畑は、鈴が鈴当の前半部に当たするため、鈴当の後半部は衝突痕のないきれいな面が出ている。

差す銚 差さない銚

各系統の差し方に共通する要素を取り出すと、一定周期で鈴を鳴らすことが挙げられる。特に東山においては、鈴と連動して剣が前後に同期すること

がある。特に東山においては、鈴と連動して剣が前後に同期すること

が重要である。次に挙げられるのは吹散をかけることである。梅ヶ畑、嵯峨、鞍馬では常に吹散をかけ、東山では電線などの影響で吹散をかける機会は減っているが、「もともと吹散が無い」という鉾はみられない。

「差す」という動態が鈴を鳴らすことに重要性をもたせていることから、次に鈴、棹、吹散に注目して考察していきたい。

出雲路氏は祇園祭の山に必ず鈴が付くこと、劍鉾においても鈴が重要な要素であることを指摘している。

祇園祭の山の松には、必ず鈴が付きます。今ではそう鳴りませんが、昔は昇っている時に鈴が随分よく鳴ったものです。鈴の音で山が動いていることが分かるのです。これもひとつの呪術です。これをさらに考えると、祇園祭の鉾の囃子、つまり鉦に通じるのではないかということになります。(中略) この鈴というのは、劍鉾では棹に触れて音を出します。ただ単に棹に当たっているのではなく、左右で二回ずつ棹にあてています。数字の8の字型に鈴が振れるように、鉦を差すんですね。(中略) 耳で聞いているだけで「劍鉾の上手な人だ」「これはちょっと未熟だな」と鈴の音で分かります。つまり8の字に二回ずつ打っている音が、リズムに乗って鳴っているのです。慣れない人でしたら片方だけ当たって鳴って、こっちはチリンと鳴り、こっちはカンと鳴っているというようなことになります。

(出雲路敬直二〇二)

東山の差し方について、鈴の音によって差し方の上手・下手がわかると述べている。劍鉾の要素として、鈴が重要な位置にあることは筆者も同意するところである。

吹散と鈴の取付け位置

吹散も劍鉾においては重要な要素であり、鈴を振り鳴らしつつも吹散をかけるという鉦差しの要素は、現在巡行に加わっていない劍鉾が、差さなくなった鉦なのか、もともと差せない鉦なのかを判定する材料になるのではないかと考えた。

腕木に吊るされている鈴を周期的に鳴らすということは、つまりは前後・左右いずれかに鈴を振るという動作になる。特に一定のリズムを刻もうとするならば、鈴の周軌道上に遮るものがあつてはならない。棹の位置関係で、鈴を吊る腕木と吹散を掛ける場所に注目すると、現在鉦差しが行なわれている鉦の、棹の部材の位置関係は上から順に、鈴の腕木→鈴当→吹散となっている。鈴当の下に吹散が掛けられるので、吹散そのものや吹散の紐・房の類が鈴の周軌道に触れることはない。これに対し、鉦差しによる巡行が行なわれていない鉦の棹をみると、その位置関係が吹散↓腕木↓鈴当となっているものが多いことに気づく。これを仮に「差せない鉦」としてグループにすると、清和天皇社、崇道神社、八瀬天満宮社、新日吉神宮(八王子御鉦、京都ゑびす神社(博団山・龍鉦、元祇園柳神社、山王神社、住吉神社、北野天満宮、御香宮神社、三栖神社、長谷八幡宮、石座神社、新宮神社、金札宮である(表7)。

前述した鉦差しの分類について、「御香宮の鉦が他地域と差異があり、鞍馬、西山、東山の三つと、もう一つのグループとして伏見が存在している」と高島氏が指摘したことに改めて触れたい。高島氏のいうところの伏見とは、城南宮、御香宮神社のほか、金札宮、三栖神社が該当すると考えられる。これら伏見の劍鉾の特徴としては、鈴(鈴当)が付いていない点が挙げられる。御香宮神社では、所謂釣鐘形の鈴(りん)ではなく、鈴(すず)が取り付けられる。伏見だけにとどまらず、このグループの特徴として、剣の長さ、厚みなどの

数値も、他のグループと差があることがわかった。剣の全長平均は差し鉾に比べて四〇〇ミリメートルから七〇〇ミリメートル短い。東山と同じように剣をしならせたとしても、振幅周期が短かすぎるため、同じような差し方はできない。

鈴と鈴当、吹散の位置関係からもと差していないと考えられる鉾は、清和天皇社や御香宮など市内中心部の外側に分布している。これらの剣鉾は、棹と剣挟が一体化していたり、剣や鎧をピンで留めたりするなど、共通点が多い。ただし、「差せない」という表現は、あくまで現在続けられている鉾差しの差し方では非合理であるという意味であり、むしろ剣鉾として古式を伝えている可能性も十分にある。

剣鉾の原型を追求しようとするのであれば、現在の鉾差しが何時から派生したのかを検証し、それ以前を考えるとという方法が適切であると考ええる。

まとめ

以上、京都市内の春季・秋季祭礼で見られる剣鉾の計測調査から、銘文や墨書の情報を整理し、考察を加えた。銘文としては近世以前のものがみられるものの、現在の鉾差しに繋がる形態は、近世に入ってから広まったものと考えられる。

銘文情報と寸法データを合わせて形態の変遷を辿てみると、時代によって剣が長大化してゆく傾向をみることができた。その傾向は、特に東山の地域に顕著であり、差し方が剣鉾の形態に強く影響を与えていることがわかる。また、鉾差しの「差す」という技能に注目してみると、鉾差しの系統によっても剣鉾の形態に違いがみられ、時代的にも地域的にも形態差があることが、

今回の計測調査で明らかとなった。

鉾差しが行なわれている各地域で共通している剣鉾部材の構成要素を抽出すると、鈴と鈴当、吹散の関係性が挙げられる。この関係性が破綻している剣鉾については、もともと「差す」ということを想定してつくられていない可能性が考えられる。「差す」ことを想定していない剣鉾は、近隣の鉾差しによって巡行する剣鉾を模してつくられた可能性が考えられるが、鉾差しが派生する以前の、原型に近い可能性もある。鉾差しの原型を考察する上で、絵画資料などの検証においても、本稿で指摘したような、剣鉾がもつ構成要素に注目していく必要があるのではないだろうか。

(京都造形芸術大学大学院芸術研究科芸術文化研究専攻 博士後期課程)

註

(1) 高島孝佳「剣鉾と鉾差し技術の系譜を考える」(京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会編『京都の剣鉾まつり』二〇二一年)

(2) 溝邊悠介「剣鉾の差し方と差す」(京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会編『京都の剣鉾まつり』二〇二一年)

〔表1〕 劍銘文一覧（年代順）

神社名	鉾名称	製作者	紀年銘	西暦	劍箱墨書	西暦	鉾番号	劍番号
北白川天神宮	黒鉾		延喜8年	908			—	—
長谷八幡宮	扇鉾	中村又兵衛 ※1	正保3年	1646			218	1
北白川天神宮	式ノ鉾		明暦2年	1656	文政13年	1830	199	1
紫野今宮神社	葵鉾(東石屋町)《劍》	星屋久兵衛	元禄7年	1694	明治2年	1869	30	2
御霊神社	龍鉾(今出川町)		正徳2年	1712			81	1
下御霊神社	桐鉾(毘沙門町)		享保12年	1727			109	1
京都ゑびす神社	兎鉾(亀井町)		寛保3年	1743	明治23年	1890	73	1
御霊神社	蓬萊鉾(鶴亀)(武者小路町)		寛保3年	1743			84	1
大豊神社	観音鉾/龍鉾(永観堂町)		延享3年 ※2	1745			10	1
清和天皇社	(茗荷鉾)		寛延4年	1751			7	1
春日神社	参番鉾(扇)《劍》		寛延4年	1751			212	2
新日吉神宮	七番鉾/三宮御鉾		宝暦 ※3	1753	天保13年	1842	58	1
三嶋神社	獅子牡丹鉾	孫四郎藤原	宝暦5年	1755			129	1
紫野今宮神社	柏鉾(作庵町)《劍》	七郎兵衛	宝暦12年	1762			24	2
清和天皇社	(鷹羽)		明和8年	1771			6	1
紫野今宮神社	龍鉾(西五辻東町)	浦井庄左衛門	天明元年	1781			27	1
下御霊神社	枝菊鉾(上河原十二町組)		天明元年	1781			115	1
下御霊神社	石竹鉾(大門町)	浦井庄左衛門流常	天明3年	1783	文政11年	1828	105	1
紫野今宮神社	柏鉾(作庵町)《劍》	丹後屋理兵衛	寛政3年	1791			24	4
金札宮	劍鉾		寛政6年	1794			63	1
金札宮	劍鉾		寛政6年	1794			64	1
新日吉神宮	五番鉾/客人御鉾		寛政10年	1798			56	1
紫野今宮神社	葵鉾(東石屋町)《劍》	浦井庄左衛門(門)	享和元年	1801			30	3
紫野今宮神社	澤瀉鉾(上善寺町)	浦井庄左衛門春常	享和元年	1801	寛政10年	1798	33	1
愛宕神社・野宮神社	菊鉾(四区)《劍》	村田茂右衛門	享和元年	1801			125	3
愛宕神社・野宮神社	龍鉾(大門町)《劍》		享和3年	1803			119	3
粟田神社	鷹羽鉾(東小物座町)	浦井庄左衛門治常	享和3年 ※4	1803			168	1
熊野神社	鳥鉾	浦井庄左衛門治常	文化2年	1805	文政9年	1826	1	1
住吉神社	菊鉾	丸屋庄左衛門治常	文化2年	1805			134	1
紫野今宮神社	柏鉾(作庵町)《劍》	浦井庄左衛門	文化3年	1806			24	3
地主神社	(清水二丁目)	浦井庄左衛門治常	文化3年	1806			47	1
八神社	二之鉾	雛屋	文化3年	1806			291	1
御霊神社	矢の鉾(塔之段六町)	浦井庄左衛門治常	文化4年	1807	明治33年	1900	88	1
粟田神社	菊鉾(堀池町)	浦(井庄左衛門)	文化4年	1807			164	1
粟田神社	瓜巴鉾(西町)	浦井庄左衛門か	文化4年	1807			178	1
中森家	(菊)	茂右衛門	文化11年	1814			302	1
京都ゑびす神社	柏鉾(北御門町)	浦井庄左衛門春常	文化12年	1815	宝暦11年	1761	78	1
愛宕神社・野宮神社	澤瀉鉾(鳥居本)	浦井庄左衛門春常	文化12年	1815			123	1
八大神社	柏鉾《劍》	浦井庄左衛門	文化14年	1817			36	2
紫野今宮神社	澤瀉鉾(上善寺町)	石野徳兵衛	文政3年	1820			34	1
下御霊神社	枝菊鉾(上河原十二町組)	丸屋庄左衛門	文政4年	1821			114	1
紫野今宮神社	劍鉾(五桜町)	浦井庄左衛門春常	文政6年	1823	大正3年	1914	28	1
紫野今宮神社	牡丹鉾(牡丹鉾町)		文政7年	1824			25	1
粟田神社	葵鉾(今道町)		(文政7年)	1824			169	1
粟田神社	瓜巴鉾(西町)	再興・袋屋兵衛	文政8年 ※5	1825			177	1
御霊神社	鷹羽鉾(上木下町)		文政9年	1826			100	1
下御霊神社	重菊鉾(常盤木町)	跡阿弥	天保5年	1834	昭和3年	1928	117	1
御霊神社	紅葉鉾(徳大寺殿町)《劍》		天保9年	1838	天保9年	1838	95	3
京都ゑびす神社	兎鉾(亀井町)《劍》		安政2年	1855			73	2
三嶋神社	松鉾《劍》		安政5年	1858			130	2
平岡八幡宮	平岡鉾/本鉾		安政5年	1858			154	1
御霊神社	寶鉾(継孝院町)	山本喜助	慶應4年	1868	大正3年	1914	96	1
紫野今宮神社	菊鉾(西千本町)		明治8年	1875			19	1
大豊神社	菊鉾(桜谷町)	松木芳太郎	明治14年	1881			8	1
下御霊神社	橘鉾(四丁目)		明治15年	1882			111	1
京都ゑびす神社	龍鉾(小松町)	物部喜八郎正芳	明治19年	1886	昭和39年	1964	76	1
御霊神社	牡丹鉾(上柳原町)	松本芳太郎	明治21年	1888			99	1
八幡宮社	劍鉾(京北上中)	堀井新兵衛	明治25年	1892			232	1
天道神社	菊鉾(松本町)		明治26年	1893	昭和39年	1964	296	1
天道神社	菊桐鉾(晒屋町)		明治31年	1898			300	1
住吉大伴神社	劍鉾	堀井新兵衛	明治32年	1899	明治32年	1899	248	1
春日神社	沓番鉾(鷹羽)	村井平兵衛	明治44年	1911	明治15年	1882	210	1
紫野今宮神社	牡丹鉾/留守鉾(牡丹鉾町)	横山孝重	大正4年	1915			26	1
平岡八幡宮	中島鉾/本鉾(龍)	森本安之助	大正6年	1917			150	1
平岡八幡宮	善妙寺鉾/練習鉾	森本安之助	大正6年	1917			153	1
平岡八幡宮	一之瀬鉾/本鉾(龍)	森本安之助	大正8年	1919	明治9年	1876	148	1
北白川天神宮	式ノ鉾/留守鉾	柳原	大正11年	1922			200	1
北白川天神宮	式ノ鉾《劍》		大正11年	1922			200	2
下御霊神社	重菊鉾(常盤木町)	柳原栄三	昭和5年	1930	昭和5年	1930	116	1

剣銘文一覧（年代順）（つづき）

神社名	鉾名称	製作者	紀年銘	西暦	剣箱墨書	西暦	鉾番号	剣番号
新日吉神宮	一番鉾/大宮御鉾《剣》		昭和9年	1934			53	2
須賀神社	剣鉾	柳原栄三	昭和11年	1936			51	1
八大神社	菊鉾《剣》	源	昭和28年	1953			35	2
新日吉神宮	一番鉾/大宮御鉾		昭和31年	1956	明治44年	1911	53	1
御霊神社	鯨鉾（二か町）		昭和38年	1963	天保10年	1839	90	1
愛宕神社・野宮神社	麒麟鉾/本鉾（中院町）	大八木鹿継	昭和49年	1974			120	1
由岐神社	名主仲間四本鉾	金龍子	昭和58年	1983	寛政4年	1792	275	1
平岡八幡宮	一之瀬鉾《剣》	京仏具（株）小堀	昭和62年	1987			149	2
愛宕神社・野宮神社	澤瀉鉾（鳥居本）	森本鋳金具製作所	平成10年	1998			122	1
平岡八幡宮	中島鉾/練習鉾（鳩）	森本鋳金具	平成10年	1998			151	1
平岡八幡宮	一之瀬鉾/練習鉾（鳩）		平成11年	1999			149	1
八大神社	菊鉾	兼定	平成13年	2001			35	1
八大神社	柏鉾	兼定	平成13年	2001			36	1
八大神社	龍鉾	兼定	平成13年	2001			37	1
愛宕神社・野宮神社	菊鉾（四区）	森本鋳金具	平成15年	2003			124	1

※1 中村又兵衛または打田五郎右衛門

※2 表に寛文10年（1670）、裏に延享3年（1746）

※3 宝暦3年か

※4 寛文7年新調、享和3年再興

※5 当初浦井庄左衛門・文政3年、再興袋屋與兵衛・文政8年

〔表2〕 鋳師一覧（年代順）

神社名	名称	製作者	剣	鋳受	鋳受箱	受金	棹	鋳箱	その他	鋳番号	剣番号
長谷八幡社	扇鉾	打田五郎右衛門か	正保3年							254	1
紫野今宮神社	葵鉾	星屋久兵衛	元禄7年							37	1
福王子神社	剣鉾(福王子)	市兵衛		享保元年						258	1
三嶋神社	牡丹鉾	孫四郎藤原	宝暦5年							140	1
栗田神社	日月龍鉾	傳兵衛				宝暦10年				211	1
紫野今宮神社	柏鉾	七郎兵衛	宝暦12年							16	1
春日神社	五番飾(藤飾・旧)	平左衛門		安永7年		安永7年				164	1
下御霊神社	石竹鉾	浦井庄左衛門	天明3年							115	1
紫野今宮神社	柏鉾	丹後屋理兵衛	寛政3年							18	1
京都系びす神社	博団山	浦井庄左衛門							寛政10年※神興鉾	69	1
花園今宮神社	剣鉾(木辻町)	丸屋庄左衛門						寛政12年		267	1
紫野今宮神社	澤瀉鉾	浦井庄左衛門	享和元年							32	1
紫野今宮神社	葵鉾	浦井庄左衛門	享和元年							38	1
愛宕神社・野宮神社	菊鉾	村田茂右之門	享和元年							139	1
栗田神社	弓矢鉾	丸屋庄左衛門						享和3年		190	1
栗田神社	鷹羽鉾	浦井庄左衛門	寛文7年(享和3年)							192	1
熊野神社	烏鉾	浦井庄左衛門	文化2年							1	1
住吉神社	菊鉾	丸屋庄左衛門	文化2年							146	1
春日神社	式番鉾(剣矢飾)	佐藤卯兵衛		文化2年						159	1
紫野今宮神社	柏鉾	丸屋浦井庄左衛門	文化3年							17	1
地主神社	(兎鉾)	浦井庄左衛門	文化3年							42	1
御霊神社	矢的鉾(新)	浦井庄左衛門	文化4年							93	1
栗田神社	瓜巴鉾	浦井庄左衛門か	文化4年							204	1
下御霊神社	石竹鉾	宇兵衛						文化11年		114	1
中森家	(菊鉾)	茂右衛門	文化11年							316	1
京都系びす神社	柏鉾	浦井庄左衛門	文化12年							73	1
愛宕神社・野宮神社	澤瀉鉾(旧)	浦井庄左衛門	文化12年							135	1
八大神社	龍鉾	丸屋庄左衛門		文化13年						46	1
紫野今宮神社	澤瀉鉾	石野徳兵衛	文政3年							33	1
福王子神社	剣鉾(鳴滝)	吉兵衛							文政3年	260	1
下御霊神社	枝菊鉾	丸屋庄左衛門	文政4年							126	1
紫野今宮神社	剣鉾	浦井庄差衛門	文政6年							34	1
栗田神社	瓜巴鉾	袋屋與兵衛(浦井庄左衛門)	文政8年							203	1
御霊神社	龍鉾(新)	庄左衛門						文政12年		85	1
下御霊神社	重菊鉾	鮎阿弥	天保5年							128	1
福王子神社	剣鉾(常盤)	神與屋直三郎			弘化4年					265	1
栗田神社	垣夕顔鉾	綿屋安兵衛						嘉永6年		206	1
御霊神社	寶鉾	山本喜助	慶應4年							103	1
福王子神社	剣鉾(常盤)	堀井新太郎						弘化4年 明治8年		264	1
大豊神社	菊鉾	松木芳太郎	明治14年							8	1
京都系びす神社	龍鉾	物部喜八郎正芳	明治19年							71	1
御霊神社	牡丹鉾	松木芳太郎	明治21年							105	1
八幡宮社	(扇鉾)	堀井新兵衛	明治25年							253	1
栗田神社	日月龍鉾	村井平兵衛		明治26年							1
春日神社	五番飾(藤飾・新)	中野喜兵衛		明治30年		明治30年				163	1
住吉大伴神社	剣鉾	堀井新兵衛	明治32年							252	1
栗田神社	弓矢鉾	藤原秀次郎						明治33年		191	1
春日神社	式番鉾(剣矢飾)	柳原栄三か				明治34年				160	1
春日神社	式番鉾(鷹羽飾)	村井平兵衛	明治44年							158	1
紫野今宮神社	牡丹鉾(留守鉾)	横山孝重	大正4年							22	1
平岡八幡宮	中島鉾	森本安之助	大正6年							167	1
平岡八幡宮	善妙寺鉾	森本安之助	大正6年							169	1
平岡八幡宮	一之瀬鉾	森本安之助	大正8年							165	1
北白川天神宮	式ノ鉾	柳原	大正11年							176	1
由岐神社	名主仲間四本鉾	堀井新				昭和4年					1
下御霊神社	重菊鉾	柳原栄三	昭和5年							129	1
須賀神社	剣鉾	柳原栄三	昭和11年							55	1
平岡八幡宮	平岡鉾	森本安之助					昭和27年				1
愛宕神社・野宮神社	麒麟鉾(本鉾)	大八木鹿継	昭和49年							132	1
由岐神社	名主仲間四本鉾	金龍子	昭和58年							280	1
平岡八幡宮	中島鉾の練習鉾	森本銚金具	平成10年							168	1
平岡八幡宮	一之瀬鉾の練習鉾・留守鉾	小堀仏具	平成11年							166	1
愛宕神社・野宮神社	菊鉾	森本銚金具	平成15年							138	1
須賀神社	菖蒲鉾	柳原栄三								54	1
御霊神社	亀鉾	与兵衛								99	1
吉田神社末社今宮社	松鉾	柳原栄三								154	1
木嶋座天照御魂神社	(太子前町)	森田六左衛門								228	1
天道神社	龍鉾(瀬戸屋町)	柳原栄三								307	1

〔表3〕 東山 各部データ

(単位: mm)

神社名	名称	剣							額上幅	棟全長	剣挟	筋固定法	筋	筋受	鈴	鉾番号	剣番号	
		継の有無	全長	剣身	茎	厚(上)	厚(中)	厚(下)										最大幅
大豊神社	菊鉢	なし	1669	1290	379	2.0		7.0	305	85	5550	竹	紐	一枚	額	900	8	1
大豊神社	扇鉢	なし	1731	1365	366	1.0		3.0	315	72	5300	竹	紐	一枚	額	1000	9	1
大豊神社	葵鉢	-		1498		1.0		4.0	315	73	5421	竹	紐	一枚	額		10	1
大豊神社	葵鉢	なし	1880	1460	420	1.6		4.0	317	76				一枚	額		11	1
大豊神社	(若王子鉢)	なし	1738	1500	238	2.0		4.0	330	73		竹	紐	分割	その他		12	1
大豊神社	菊鉢(観音鉢)	なし	1847	1410	437	1.0	3.0	6.0	315	75		桧	紐	一枚	額		13	1
大豊神社	牡丹鉢	なし	1822	1320	502	1.5	3.0	3.6	315	84		竹	紐	一枚	額		14	1
大豊神社	龍鉢(観音鉢)	鉄	1659	1178	481	1.2		4.0	305	93		竹	紐	一枚	額		15	1
八大神社	柏鉢	なし	1936	1387	549	0.8	2.1	3.9	325	77	4476	竹	紐	分割	その他	1300	48	1
八大神社	柏鉢(剣のみ)	あり 320	1933	1400	533	1.2	2.8	4.1	320	77							49	2
八大神社	龍鉢	なし	1907	1433	474	1.3	3.0	4.0	314	71	5003	竹	紐	一枚	額	1600	50	1
八大神社	龍鉢(剣のみ)	あり 250	1892	1427	465	1.3	3.2	4.3	316	70							51	2
八大神社	菊鉢	なし	1920	1450	470	1.2	2.0	4.4	320	75	4702	竹	紐	一枚	額	1200	52	1
八大神社	菊鉢(剣のみ)	有	1820	1326	494	1.0	2.2	4.3	321	79							53	2
八大神社	菊鉢(剣のみ)	なし	1910	1450	460	1.0	3.6	6.5	320	75							54	3
須賀神社	橘鉢	有 82	1846	1297	549	1.0	1.6	3.2	295	80	5250	竹	紐	一枚	額		59	1
須賀神社	葵鉢	なし	1838	1388	450	2.0	2.0	5.0	328	85	5365	竹	紐	分割	額	850	60	1
須賀神社	葵鉢(剣のみ)	有 86	1828	1323	505	1.2	1.9	3.6	285	93							61	2
須賀神社	菖蒲鉢	なし	1795	1326	469	2.5	2.5	4.5	330	76	5260	竹	紐	一枚	額	950	62	1
須賀神社	剣鉢	なし	1897	1401	496	1.0	2.4	5.4	330	73	-	竹	紐	分割	その他	800	63	1
須賀神社	菊鉢	なし	1800	1280	520	0.9	2.0	4.7 ※9.2	317	97	5485	竹	紐	分割	その他	1100	64	1
須賀神社	菊鉢(剣のみ)	なし	1892	1358	534	1.0	2.1	5.1	298	91							65	2
新日吉神社	一番鉢(大宮町)	なし	1860	1383	477	3.0		5.0	316	82	5151	桧	紐	分割	その他		68	1
新日吉神社	一番鉢(大宮町)剣のみ	なし															69	2
新日吉神社	二番鉢(下二之宮町)	-	2006	1520	486	1.0		5.0	331	92		桧	紐	一枚	額	-	70	1
新日吉神社	四番鉢(八王子町)	なし	1405	835	570	1.0	3.0	4.0	447	91	2644	桧	ピン	一枚	額	400	71	1
新日吉神社	五番鉢(稲荷町)	有 350	1950	1530	420	3.0		6.0	330	74		-	ピン	一枚	雲型		72	1
新日吉神社	六番鉢	-	1793	1395	398	1.2	2.8	4.5	332	82	5079	竹	ピン	一枚	雲型		73	1
新日吉神社	七番鉢	有 217	1601	1193	408	1.6		6.1	324	88					額		74	1
下御霊神社	石竹鉢	有 335	1890	1400	490	2.0	3.0	5.0	302	79		竹	ピン	一枚	額		127	1
下御霊神社	石竹鉢	なし	1558	1313	245	1.5		6.0	305	80		桧	紐	一枚	額		128	1
下御霊神社	扇鉢	なし	1764		1764	2.0	3.0	7.0	305	84	5270	竹	紐	分割	額	1200	129	1
下御霊神社	扇鉢	有 410	1245	700	545	1.8	1.6	6.0	300	86							130	1
下御霊神社	扇鉢(箱)				0												131	1
下御霊神社	菊鉢	-		1110		2.0		5.0	324	74		竹	紐	分割	額		132	1
下御霊神社	菊鉢	-		1120		2.0	2.8	4.3	321		-	桧	紐	分割	額	750	133	1
下御霊神社	桐鉢	鉄	1887	1322	565	1.8	2.4	※8.8	280	89	5121	竹	紐	一枚	額		134	1
下御霊神社	桐鉢	鉄	1665	1175	490	1.3	3.0	4 ※9.7	310	80	-	桧	紐	一枚	額		135	1
下御霊神社	橘鉢	有 188	1818	1368	450	1.0	2.1	5.4	323	75	4999	竹	ピン	一枚	額		136	1
下御霊神社	葵鉢	有 1831	1306	525	1.0			5.0	314	80		竹	紐	分割	額	1300	137	1
下御霊神社	葵鉢	有	1625	1125	500	3.2		6.2 ※8.2	324	83		竹	紐	分割	額		138	1
下御霊神社	枝菊鉢	なし	1732	1331	401	1.2	2.0	4.8		2313	竹	ピン	一枚	額	930	139	1	
下御霊神社	枝菊鉢	なし	1660	1305	355	1.7	3.8	6.2			-	桧	紐	一枚	額	950	140	1
下御霊神社	重菊鉢	なし	1920	1507	413	0.8	3.3	5.0	302	74	-	桧	紐	一枚	額	950	141	1
下御霊神社	重菊鉢	有 116	1820	1298	522	1.2	2.8	4.9	321	79	-	竹	紐	一枚	額	900	142	1
三嶋神社	牡丹鉢	鉄	1599	1174	425	1.2	2.3	5.0	289	82	5005	竹	紐	一枚	額	500	159	1
三嶋神社	松鉢	鉄	1727	1218	509	19.0	2.5	4.1	320	76	4945	竹	紐	一枚	額	650	160	1
三嶋神社	菊鉢	鉄	1420	1125	295	0.5	2.4	3.4	3.6	77	4812	桧	紐	一枚	額	550	161	1
吉田神社末社今宮社	唐胡麻鉢		1775	1310	465	1.3	1.9	4.8	329	72	5158	竹	紐	一枚	その他	800	170	1
吉田神社末社今宮社	唐胡麻鉢(練習鉢)				0						5562	竹	紐	分割	その他	700	171	1
吉田神社末社今宮社	矢鉢		1793	1235	558	0.9	2.7	5.8	325	75	5145	竹	紐	一枚	額	1000	172	1
吉田神社末社今宮社	松鉢		1886	1355	531	1.5	3.0	5.6	315	76		竹	紐	一枚	その他	850	173	1
春日神社	吾番鉢(鷹羽)	なし	1870	1500	370	1.0		5.0	339	82	5275	竹	紐	一枚	州浜	900	177	1
春日神社	吾番鉢(鷹羽)剣のみ	なし	1551	1277	274	1.0	2.1	4.0	310	100							178	2
春日神社	式番鉢(剣矢)	有	1925	1337	588	1.0		4.0	325	75	4488	竹	紐	複層	その他	1500	179	1
春日神社	式番鉢(剣矢)剣のみ				0												180	2
春日神社	参番鉢(扇)	なし	1845	1395	450	1.5		4.5	325	82	4850	竹	紐	分割	その他	950	181	1
春日神社	参番鉢(扇)剣のみ	なし	1326	1188	138	1.0		4.0	258	78							182	2
春日神社	参番鉢(扇)剣のみ	-	1844	1397	447	1.5		5.5	315	84							183	3
春日神社	四番鉢(紅葉飾)	なし	1837	1409	428	1.5		6.0	334	72	4548	竹	紐	一枚	額	600	184	1
春日神社	五番鉢(藤飾・新)	なし	1860	1400	460	1.3	1.9	4.6	296	80	4685	竹	紐	一枚	額	1650	185	1
春日神社	五番鉢(藤飾・旧)	鉄	1289	953	336	1.0	1.7	3.7 ※10	267	83		竹	紐	一枚	額		186	1
北白川天神宮	吾ノ鉢	有 -	1920	1440	480	1.1	3.2	5.2	334	80		竹	紐	分割	その他		198	1
北白川天神宮	吾ノ鉢(留守鉢)	有 -	1795	1406	389	1.2	3.7	6.0	318	70		竹	紐	分割	その他		199	1
北白川天神宮	吾ノ鉢(黒鉢)				0												200	1
北白川天神宮	式ノ鉢	有 135	1797	1370	427	1.3	2.6	5.5	316	70	5010	竹	紐	分割	額	800	201	1
北白川天神宮	式ノ鉢(留守鉢)	切断	1892	1479	413	1.4	2.2	5.0	325	74	2415	竹	紐	分割	額	1050	202	1
北白川天神宮	式ノ鉢(剣のみ)	なし	1822	1437	385	0.9	2.1	4.9	330	77							203	2
北白川天神宮	参ノ鉢	有 137	1940	1459	481	1.0	1.7	5.5	325	-	5000	竹	紐	分割	その他		204	1
北白川天神宮	参ノ鉢(留守鉢)	なし	1809	1345	464	1.2	2.4	5.0	340	-	2434	竹	紐	分割	額		205	1
粟田神社	阿古陀鉢(瓜鉢)	有 85	1426	1011	415	1.4	2.4	4.4	285	87	2480	ピン	紐	一枚	額	600	206	1
粟田神社	阿古陀鉢(瓜鉢)	鉄	1205	965	240	1.7	2.7	3.4 ※7.4	290	95		ピン	紐	一枚	額	500	207	1
粟田神社	地藏鉢(錫杖鉢)	-		1480		1.5	3.5	6.0	330	-		竹	紐	一枚	額		208	1

東山 各部データ (つづき)

(単位: mm)

神社名	名称	剣								額上幅	棹全長	剣挟	鋸固定法	鋸	鋸受	鈴	鉾番号	剣番号
		継の有無	全長	剣身	茎	厚(上)	厚(中)	厚(下)	最大幅									
栗田神社	地藏鉾(錫杖鉾)			1225		1.2	3.0	4.7	315	80		竹	紐	一枚	額		209	1
栗田神社	柏鉾	なし	1665	1280	385	1.4	2.5	6.6	323	76	2460	竹	紐	一枚	額		210	1
栗田神社	柏鉾	鉄	1635	1210	425	2.0	2.0	5.0	320	94		竹	紐	一枚	額		211	1
栗田神社	三鈷鉾	なし	1890	1477	413	1.0	2.4	6.4	321	78	5713	竹	紐	一枚	額		212	1
栗田神社	三鈷鉾	鉄	1560	1260	300	1.0	2.0	4.4 ※9	324	90		檜	紐	一枚	額		213	1
栗田神社	弓矢鉾	鉄		1275		1.0	3.0	※9.5	291	87		檜	ピン	一枚	額	1050	216	1
栗田神社	弓矢鉾	鉄		1050		1.0	2.5	※7	325	73		檜	紐	一枚	額	450	217	1
栗田神社	鷹羽鉾					1.5	2.2	4.0	325	75		竹	ピン	一枚	額		218	1
栗田神社	鷹羽鉾	鉄	1423	1153	270	0.8	2.5	4.4	305	85		檜	ピン	一枚	額		219	1
栗田神社	葵鉾	補強	1840	1398	442	1.3	2.1	4.3 ※10	336	78		竹	ピン	一枚	額		220	1
栗田神社	橘鉾	なし	1945	1457	488	1.0	1.6	5.1	349	76	5677	竹	ピン	一枚	額		221	1
栗田神社	橘鉾	なし	1953	1461	492	1.0	1.8	5.8	344	79	4750	竹	ピン	一枚	額		222	1
栗田神社	橘鉾(剣のみ)	-	1946	1458	488	1.0	2.0	5.0	334	78		檜					223	2
栗田神社	橘鉾(剣のみ)	-	1788	1283	505	1.0	2.5	5.0	344	78		檜					224	3
栗田神社	松鉾	なし	2001	1451	550	0.9	2.2	5.0	305	75		竹	紐	一枚	額		225	1
栗田神社	松鉾	鉄	1752	1252	500	1.0	1.7	4.3 ※9.7	325	85			紐	一枚			226	1
栗田神社	獅子牡丹鉾	なし	1963	1526	437	0.9	2.4	5.5	314	78	5296	竹	ピン	一枚	額		227	1
栗田神社	獅子牡丹鉾(町内留守)	補強	1968	1537	431	1.0	1.9	4.5 ※8	357	86		竹	紐	一枚	額	700	228	1
栗田神社	獅子牡丹鉾(神社留守)	鉄	1964	1531	433	1.1	2.2	4.7 ※8	352	86		檜	紐	一枚	額		229	1
栗田神社	瓜巴鉾	なし	1763	1365	398	1.0		4.0	326	72		竹	紐	一枚	額		230	1
栗田神社	瓜巴鉾	切断	1614	1210	404	1.0		3.2	319	76		竹	ピン	一枚	額		231	1
栗田神社	垣夕顔鉾	なし	1810	1370	440	1.4	2.4	5.3	325	77	4993	竹	紐	一枚	額		232	1
栗田神社	垣夕顔鉾	鉄	1720	1370	350	1.0	2.0	4.4 ※10	334	85		竹	紐(ピン)	一枚	額		233	1
栗田神社	葡萄栗鼠鉾				0							竹	ピン	一枚	額		234	1
栗田神社	葡萄栗鼠鉾				0							竹	ピン	一枚	額		235	1
栗田神社	竹虎鉾	不明		1432		1.0		7.0	332	78	5126	竹	ピン	一枚	額		236	1
栗田神社	琴高鉾				0								ピン	一枚	額		237	1
栗田神社	日月龍鉾	なし	1963	1490	473	1.0	2.4	5.1	332	71	4914	-	ピン	一枚	額		238	1
栗田神社	日月龍鉾				0							-	紐	一枚	額		239	1
栗田神社	日月龍鉾				0								ピン	一枚	額		240	1
栗田神社	桐鉾	なし	1904	1480	424	1.1	2.4	5.1	320	77	5135	竹	ピン	一枚	額		241	1
栗田神社	桐鉾	有 別材	1650	1225	425	1.2	2.2	4 ※10.2	318	80		竹	紐	一枚	額		242	1
栗田神社	鶴鉾	なし	1967	1532	435	1.0		5.0	315	79	5383	竹	紐	一枚	額		243	1

(注) 剣厚みの項の「※」は、後補で継いでいる部分を含む厚みを示す。

〔表4〕梅ヶ畑 各部データ

(単位: mm)

神社名	名称	剣								額上幅	棹全長	剣拵	拵固定法	拵	拵受	鈴	鉾番号	剣番号
		継の有無	全長	剣身	茎	厚(上)	厚(中)	厚(下)	最大幅									
平岡八幡宮	一之瀬銚	なし	1565	1184	381	1.2	2.1	5.4	325	90	4290	檜	紐	一枚	その他	1000	187	1
平岡八幡宮	一之瀬銚(練習銚)	なし	1628	1290	338	1.4	2.5	3.3	302	88		檜	紐	一枚	額	800	188	1
平岡八幡宮	一之瀬銚(剣のみ)	なし	1636														189	2
平岡八幡宮	一之瀬銚(剣のみ)	なし	1712														190	3
平岡八幡宮	中島銚(竜)	なし	1561	1238	323	1.5	2.0	6.0	340	84	4300	檜	紐	一枚	その他		191	1
平岡八幡宮	中島銚(鳩)	なし	1461	1138	323		1.0	6.0	343	86		檜	紐	一枚	額		192	
平岡八幡宮	中島銚(剣のみ)	なし	1539	1215	324	1.0	1.5	4.0	299	80		檜	紐	一枚	額		193	2
平岡八幡宮	善妙寺銚	なし	1455	1151	304	2.0	3.0	7.0	333	98	4121	檜	紐	一枚	額		194	1
平岡八幡宮	善妙寺銚の練習銚・留守銚	-	1490	1195	295	1.0		5.0	330	86	4598	檜	紐	一枚	額		195	1
平岡八幡宮	平岡銚	切断	1501	1153	348	1.0	2.0	4.0	291	78	4600	檜	紐	一枚	額		196	1
平岡八幡宮	平岡銚の練習銚・留守銚	有	122	1437	1153	284	1.0	1.8	5.0	317	82	4624	-	紐	一枚	-	197	1

〔表5〕嵯峨 各部データ

神社名	名称	剣								額上幅	棹全長	剣拵	拵固定法	拵	拵受	鈴	鉾番号	剣番号
		継の有無	全長	剣身	茎	厚(上)	厚(中)	厚(下)	最大幅									
愛宕神社・野宮神社	龍銚(本銚)	なし	1833	1385	448	1.6	2.0	3.8	340	83	4360	檜	ボルト	一枚	額	1400	143	1
愛宕神社・野宮神社	龍銚(留守銚)	なし	1600	1142	458	1.0	2.0	4.0	335	84	-	檜	ボルト	一枚	額		144	1
愛宕神社・野宮神社	龍銚(剣のみ)	なし	1265	1102	163	2.0	2.0	4.0	312	86							145	2
愛宕神社・野宮神社	龍銚(剣のみ)	折れ	895	825	70	1.6	1.7	2.3	271	93							146	3
愛宕神社・野宮神社	麒麟銚(本銚)	なし	1803	1375	428	1.8	1.6	3.6	308	78	4230	檜	ボルト	一枚	額	2400	147	1
愛宕神社・野宮神社	麒麟銚(留守銚)	なし	1771	1360	411	1.4	2.0	5.6	305	76	-	檜	ボルト	一枚	額		148	1
愛宕神社・野宮神社	澤潟銚	なし	1534	1250	284	1.0	1.7	5.0	310	76	4309	檜	ボルト	一枚	額		149	1
愛宕神社・野宮神社	澤潟銚	※身継	1525	1240	285	1.2	2.4	5.8	298	75	4264	檜	ボルト	一枚	額		150	1
愛宕神社・野宮神社	澤潟銚(剣のみ)	なし	1479	1200	279	1.0	2.4	5.0	323	80							151	2
愛宕神社・野宮神社	澤潟銚(剣のみ)	なし	1360	1080	280	1.2	1.7	4.3	325	85		檜	ボルト	一枚	額		152	3
愛宕神社・野宮神社	牡丹銚	なし	1656	1266	390	1.5	2.0	5.0	295	75	4306	檜	ボルト	一枚	額	1250	153	1
愛宕神社・野宮神社	牡丹銚(旧・練習銚)	なし	1366	1139	227	1.0	2.0	4.0	250	76	4337	檜	ボルト	一枚	額	1200	154	1
愛宕神社・野宮神社	菊銚	なし	1592	1292	300	0.8	1.4	5.2	-	-	4255	檜	ボルト	一枚	額	1550	155	1
愛宕神社・野宮神社	菊銚						1.8	3.0				檜	ピン		額			
愛宕神社・野宮神社	菊銚(剣のみ)	有	1592	1298	294	0.8		4.6	313	87							157	2
愛宕神社・野宮神社	菊銚(剣のみ)	なし	1090	886	204	1.0	2.0	3.0	264	92							158	3

〔表6〕鞍馬 各部データ

神社名	名称	剣								額上幅	棹全長	剣拵	拵固定法	拵	拵受	鈴	鉾番号	剣番号
		継の有無	全長	剣身	茎	厚(上)	厚(中)	厚(下)	最大幅									
由岐神社	上大惣四本銚	なし	1470	1140	330	1.5	3.0	5.0	310	95	4647	-	紐	分割	州浜		304	1
由岐神社	中大惣四本銚	鉄	1306	1050	256	0.6	2.6	2.5 ※8	287	100	5506	棒一体	紐	分割	州浜	900	305	1
由岐神社	中大惣一本銚	補強 100	1316	1060	256	0.6	1.0	3.2 ※7.2	230	110	3111	棒一体	紐	一枚	その他	400	306	1
由岐神社	中大惣留守銚	鉄	1280	1030	248	1.0	2.0	3 ※8	284	97		棒一体	紐	分割	州浜		307	1
由岐神社	下大惣四本銚	なし	1618	1220	398	2.0	2.2	4.8	286	88	5337	檜	紐	分割	その他	600	308	1
由岐神社	下大惣一本銚	鉄	929	780	149	0.9	2.4	4.3 ※11.2	-	-	3006	檜	紐	分割	州浜	550	309	1
由岐神社	下大惣留守銚	鉄	1815	1465	350	1.0	3.0	6 ※14	320	92		なし	紐	分割	その他		310	1
由岐神社	名主仲間四本銚	なし	1510	1225	285	1.0	1.0	4.0	331	106		棒一体	紐	分割	州浜	500	312	1
由岐神社	名主仲間留守銚	鉄	1340	1040	300	0.2	1.7	1.7	255	92		檜	なし	なし	州浜		313	1
由岐神社	僧達仲間四本銚	なし	1807	1450	357	1.0		5.0	286	100	5160	檜	紐	一枚	額	600	314	1
由岐神社	僧達仲間留守銚	-	1347	1050	297	1.0		4.0	304	106		なし	紐	一枚	額		315	1
由岐神社	大工衆仲間一本銚	なし		955		1.1	2.7	4.6	265	82	3028	なし	紐	一枚	州浜		316	1
由岐神社	大工衆仲間留守銚	-		1160		1.7	2.1	5.3	320	85		なし	紐	一枚	州浜		317	1

〔表7〕 差さない鉾

(単位: mm)

神社名	名称	剣								額上幅	棹全長	剣挟	銚固定法	銚	銚受	鈴	鉾番号	剣番号
		継の有無	全長	剣身	茎	厚(上)	厚(中)	厚(下)	最大幅									
清和天皇社	(鷹羽鉾)	なし	1008	818	190	0.8	1.5	2.0	260	100	2872	×(ピン)	ピン	分割	額		5	1
清和天皇社	(茗荷鉾)	なし	969	782	187	1.4	2.3	3.8	270		3850	×(ピン)	ピン	一枚	額		6	1
清和天皇社	(扇鉾)	なし	1110	936	174	1.2	1.9	3.0	255	90	3632	×(ピン)	ピン	分割	額		7	1
崇道神社	(龍)	有	955		955	1.0		1.5	195	50	4090	檜	ピン	一枚	その他		46	1
崇道神社	(鳳凰)	有	957		957	0.8		2.0	200	45	4085	檜	ピン	一枚	その他		47	1
八瀬天満宮社	扇鉾	有 別材	745	628	117	1.0		1.0	114	59	4210	檜	ピン	一枚	なし		56	1
八瀬天満宮社	鷹羽鉾	有 別材	745	629	116	1.0		1.0	114	60	4080	檜	ピン	一枚	額		57	1
八瀬天満宮社	沢瀉鉾	有 別材	773	628	145	1.2		1.2	118	59	4115	檜	ピン	一枚	額		58	1
新日吉神社	四番鉾(八王子町)	なし	1405	835	570	1.0	3.0	4.0	447	91	2644	檜	ピン	一枚	額	400	71	1
京都系びす神社	博団山	有	1507	1273	234	1.2	1.6	3.2	342	112	3181	檜	ピン	分割	額		79	1
京都系びす神社	龍鉾	なし	1873	1411	462	1.0	1.8	4.8	322	86	2621	檜	ピン	一枚	額		81	1
元祇園神社	朱雀鉾	有		811		1.3		4.0	255	94	2648	檜	額一体	一枚	額		86	1
元祇園神社	橘鉾	有	1194	809	385	1.3		1.3	256	93	2617	檜	額一体	一枚	額		87	1
元祇園神社	日月鉾	有		802		2.3		4.3	257	91	2483	檜	額一体	一枚	額		88	1
元祇園神社	龍鉾					2.0		2.0	253	90	2805	檜	額一体	一枚	額		89	1
元祇園神社	虎鉾	有	1129	629	500	1.5		1.7	244	91		檜	額一体	一枚	額		90	1
元祇園神社	鳳凰鉾	有	1228	780	448	1.7		2.3	244	90		檜	額一体	一枚	額		91	1
元祇園神社	菊鉾	有		782		2.0		2.5	246	90	2875	檜	額一体	一枚	額		92	1
山王神社	(鳳凰)		694	540	154	1.7	1.8	1.8	187	85		カシ	ボルト	一枚	額		94	1
住吉神社	菊鉾	なし	1567	1302	265	1.0	2.5	4.0	303	77	1545	竹	紐	分割	額		165	1
住吉神社	松鉾	鉄	1552	1255	297	1.0	2.5	3.5 ※9.5	330	84	1533	竹	紐	一枚	額		166	1
住吉神社	牡丹鉾	鉄	1524	1261	263	1.0	2.0	4 ※11.5	313	79	1540	竹	紐	一枚	額		167	1
北野天満宮	梅鉾	別材	1758	1318	440	1.0	2.1	4.0	320	91	2485	檜	紐	一枚	その他	900	168	1
北野天満宮	松鉾	なし		1274		1.0	1.8	3.0	319	101	2829	檜	紐	一枚	額	750	169	1
御香宮神社	(一番)	鉄	1027	616	411	0.5	2.0	2 ※11	190	82	2894	樟一体	額一体	一枚	州浜		246	1
御香宮神社	(二番)	鉄	1038	613	425	1.0	2.0	3 ※12	193	80	2894	樟一体	額一体	一枚	州浜		247	1
御香宮神社	(三番)	鉄	980	613	367	1.0	2.0	3 ※12	191	80	2894	樟一体	額一体	一枚	州浜		248	1
御香宮神社	(四番)					1.0	2.0	3 ※12	194	82	2894	樟一体	額一体	一枚	州浜		249	1
御香宮神社	(五番)	鉄	1003	608	395	1.0	2.0	2 ※13	185	80	2894	樟一体	額一体	一枚	州浜		250	1
御香宮神社	(六番)	鉄	1008	611	397	1.0	2.0	3 ※11	192	80	2894	樟一体	額一体	一枚	州浜		251	1
御香宮神社	(七番)	鉄	1020	622	398	1.0	2.0	4 ※13	182	80	2894	樟一体	額一体	一枚	州浜		252	1
御香宮神社	(八番)	鉄	943	610	333	1.0	2.0	3 ※11	192	82	2894	樟一体	額一体	一枚	州浜		253	1
御香宮神社	(九番)	鉄	1004	608	396	1.0	2.0	4 ※12	190	81	2894	樟一体	額一体	一枚	州浜		254	1
三栖神社	(一番)	鉄	1050	795	255	1.5	1.6	1.5 ※6	207	80	2733	なし	額一体	一枚	額		274	1
三栖神社	(二番)	鉄	1045	792	253	1.4	1.6	1.7 ※6.3	206	80	2733	なし	額一体	一枚	額		275	1
三栖神社	(三番)	鉄	1050	795	255	1.3	1.6	1.6 ※6.6	207	80	2732	なし	額一体	一枚	額		276	1
三栖神社	(四番)	鉄	1037	899	138	1.4	1.7	1.6 ※6.2	205	80	2733	なし	額一体	一枚	額		277	1
三栖神社	(五番)	鉄	1050	795	255	1.6	1.7	1.5 ※6.2	205	80	2732	なし	額一体	一枚	額		278	1
長谷八幡社	扇鉾	別材	1260	820	440	1.7	2.3	3.0	215	80	3890	なし	ピン	分割	その他	300	283	1
長谷八幡社	菊鉾	鉄	1379	808	571	2.0		3.0	235	96	3600	なし	ピン	一枚	額	350	284	1
長谷八幡社	龍鉾	鉄				1.0		4.0	250		3890	なし	ピン	一枚	その他	400	285	1
石座神社	上蔵町朝の鉾		1055	855	200						4450					300	318	1
石座神社	上蔵町昼の鉾		1670	1292	378						5307					900	319	1
石座神社	忠在地町朝の鉾		1080	880	200						3324					400	320	1
石座神社	忠在地町昼の鉾		1165	965	200											1200	321	1
石座神社	下在地町朝の鉾		1145	915	230						4667						322	1
石座神社	下在地町昼の鉾		1614	1203	411						4777						323	1
石座神社	西河原町朝の鉾		1044	869	175						4383						324	1
石座神社	西河原町昼の鉾		1702	1274	428						5870						325	1
石座神社	中在地町朝の鉾		1070	870	200						3330						326	1
石座神社	中在地町昼の鉾		1518	1241	277						5293						327	1
新宮神社	妙法		950		950						2460						335	1
新宮神社	菊の御紋		957		957						2457						336	1
金札宮	剣鉾	なし	785	651	134	0.6	1.2	2.5	143	50	3011	その他木材	紐	一枚	額		349	1
金札宮	剣鉾	なし	787	647	140	1.0	1.5	2.9	144	51	3006	その他木材	紐	一枚	額		350	1



長谷八幡宮・扇鉾

ID218-1

正保3年（1646） 莖銘
（身820+莖440）=1260
莖は銅製



《参考》北白川天神宮 一之鉾仲間・黒鉾

延喜8年（908） 莖銘
未計測
黒鉾。銅合金ではなく、鉄製で特
異な存在である。

紀年銘が刻まれた 剣鉾の剣一覽

剣鉾の製作年代は、剣、鉾受、受
金、棹などに記されていることがあ
る。ここでは、紀年銘を持つ剣につ
いて、古いものから順に昭和初期ま
での61本を紹介する。

※法量の単位はミリメートル
※ID番号は資料編第九章に掲載し
た（鉾番号-剣番号）である。



御霊神社・龍鉾

ID81-1

正徳2年（1712） 莖銘
（身1145+莖284）=1429



紫野今宮神社・葵鉾

ID30-2

元禄7年（1694） 莖銘
（身1060+莖215）=1275
現在使用せず



北白川天神宮・式ノ鉾

ID199-1

明暦2年（1656） 莖銘
（身1370+莖427）=1797
写真左 莖継 -135



御霊神社・蓬萊鉾

ID84-1

寛保3年（1743） 莖銘
（身1112+莖452）=1564



京都ゑびす神社・兎鉾

ID73-1

寛保3年（1743） 身銘
未計測



下御霊神社・桐鉾

ID109-1

享保12年（1727） 莖銘
（身1322+莖565）=1887
莖は鉄



春日神社・三番鉾

ID212-2

寛延4年（1751） 茎銘
（身1188+茎138）=1326
写真中 現在使用せず



清和天皇社・（茗荷鉾）

ID7-1

寛延4年（1751） 茎銘
（身782+茎187）=969



大豊神社・龍鉾

ID10-1

延享3年（1746） 茎銘
（身1178+茎481）=1659
茎は鉄



清和天皇社・（鷹羽鉾）

ID6-1

明和8年（1771） 茎銘
（身818+茎190）=1008



紫野今宮神社・柏鉾

ID24-2

宝暦12年（1762） 茎銘
（身+茎）=1454
現在使用せず



三嶋神社・獅子牡丹鉾

ID129-1

宝暦5年（1755） 茎銘
（身1174+茎425）=1599
茎は鉄



紫野今宮神社・柏鉾

ID24-4

寛政3年（1791） 茎銘
（身+茎）=1807
現在使用せず



下御霊神社・石竹鉾

ID105-1

天明3年（1783） 茎銘
（身1313+茎245）=1558



下御霊神社・枝菊鉾

ID115-1

天明元年（1781） 茎銘
（身1305+茎355）=1660
写真左



愛宕神社・野宮神社・菊鉾

ID125-3

享和元年（1801）身銘
（身886+茎204）=1090
現在使用せず



新日吉神宮・五番鉾

ID56-1

寛政10年（1798）身銘
（身1530+茎420）=1950
茎継 オリジナル110



金札宮

ID63-1

寛政6年（1794）身銘
（身651+茎134）=785
64-1も同一のため省略



栗田神社・鷹羽鉾

ID168-1

享和3年（1803）身銘
（身1153+茎270）=1423
茎は鉄



紫野今宮神社・澤瀉鉾

ID33-1

享和元年（1801）身銘
（身1430+茎320）=1750
34と共有の可能性あり



紫野今宮神社・葵鉾

ID30-3

享和元年（1801）身銘
（身1355+茎377）=1732
現在使用せず
茎継 オリジナル250



住吉神社・菊鉾

ID134-1

文化2年（1805）身銘
（身1302+茎265）=1567



熊野神社・烏鉾

ID1-1

文化2年（1805）身銘
（身1390+茎402）=1792



愛宕神社・野宮神社・龍鉾

ID119-3

享和3年（1803）身銘
（身825+茎70）=895
現在使用せず
茎は折れている



八神社・二之鉾

ID291-1

文化3年（1806） 茎銘
（身1365+茎461）=1826
茎継 オリジナル317



地主神社・鉾（日月と兎）

ID47-1

文化3年（1806） 茎銘
（身1230+茎455）=1685
茎は鉄



紫野今宮神社・柏鉾

ID24-3

文化3年（1806） 茎銘
（身1630+茎未計測）=未計測
現在使用せず



中森家

ID302-1

文化11年（1814） 茎銘
（身1160+茎236）=1396



御霊神社・矢的鉾

ID88-1

文化4年（1807） 茎銘
（身1440+茎187）=1627



栗田神社・瓜巴鉾

ID178-1

文化4年（1807） 茎銘
（身1210+茎404）=1614
茎は切断されている



紫野今宮神社・澤瀉鉾

ID34-1

文政3年（1820） 茎銘
（身1388+茎321）=1709
34と共有の可能性あり



愛宕神社・野宮神社・澤瀉鉾

ID123-1

文化12年（1815） 茎銘
（身1240+茎285）=1525
写真左 現在使用せず
身を継いでいる



京都ゑびす神社・柏鉾

ID78-1

文化12年（1815） 茎銘
（身1009+茎423）=1432



栗田神社・葵鉾

ID169-1

文政7年(1824) 莖銘
(身1398+莖442) = 1840



紫野今宮神社・剣鉾

ID28-1

文政6年(1823) 莖銘
(身+莖) = 1912



下御霊神社・枝菊鉾

ID114-1

文政4年(1821) 莖銘
(身1331+莖401) = 1732
写真右



御霊神社・鷹羽鉾

ID100-1

文政9年(1826) 莖銘
(身1285+莖514) = 1799
写真右
莖継 オリジナル217



栗田神社・瓜巴鉾

ID177-1

文政8年(1825) 莖銘
(身1365+莖398) = 1763



紫野今宮神社・牡丹鉾(留守鉾)

ID25-1

文政7年(1824) 莖銘
(身1391+莖369) = 1760



京都ゑびす神社・兎鉾

ID73-2

安政2年(1855) 莖銘
未計測
現在使用せず



御霊神社・紅葉鉾

ID95-3

天保9年(1838) 莖銘
(身1270+莖470) = 1740
現在使用せず



下御霊神社・重菊鉾

ID117-1

天保5年(1834) 莖銘
(身1298+莖522) = 1820
莖継 オリジナル116



大豊神社・菊鉾

ID8-1

明治14年（1881） 茎銘
（身1290+茎379）=1669



御霊神社・寶鉾

ID96-1

慶應4年（1868） 茎銘
（身1191+茎412）=1603



平岡八幡宮・平岡鉾

ID154-1

安政5年（1858） 茎銘
（身1153+茎348）=1501
茎は切断



八幡宮社・（扇鉾）

ID232-1

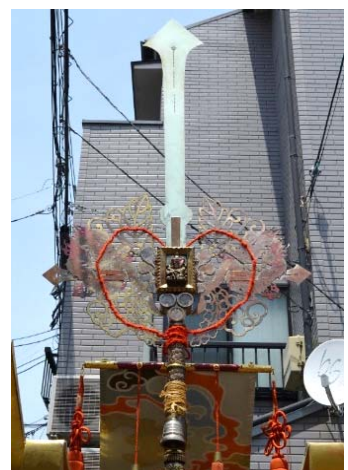
明治25年（1892） 身銘
（身1170+茎290）=1460



御霊神社・牡丹鉾

ID99-1

明治21年（1888） 茎銘
（身1360+茎339）=1699



京都糸びす神社・龍鉾

ID76-1

明治19年（1886） 茎銘
（身1411+茎462）=1873



春日神社・壱番鉾（鷹羽）

ID210-1

明治44年（1911） 茎銘
（身1500+茎370）=1870



住吉大伴神社

ID248-1

明治32年（1899） 茎銘
（身1311+茎506）=1817



天道神社・菊鉾

ID296-1

明治26年（1893） 茎銘
未計測



平岡八幡宮・中島鉾

ID150-1

大正6年(1917) 茎銘
(身1238+茎323) =1561



平岡八幡宮・善妙寺鉾

ID153-1

大正6年(1917) 茎銘
(身1195+茎295) =1490



紫野今宮神社・牡丹鉾

ID26-1

大正4年(1915) 茎銘
(身1397+茎347) =1744



北白川天神宮・式ノ鉾(留守鉾)

ID200-2

大正11年(1922) 茎銘
(身1437+茎385) =1822



北白川天神宮・式ノ鉾(留守鉾)

ID200-1

大正11年(1922) 茎銘
(身1479+茎413) =1892
茎は切断



平岡八幡宮・一之瀬鉾

ID148-1

大正8年(1919) 茎銘
(身1184+茎381) =1565



須賀神社・剣鉾

ID51-1

昭和11年(1936) 茎銘
(身1401+茎496) =1897



新日吉神社・一番鉾・大宮御鉾

ID53-2

昭和9年(1934) 茎銘
未計測



下御霊神社・重菊鉾

ID116-1

昭和5年(1930) 茎銘
(身1507+茎413) =1920